

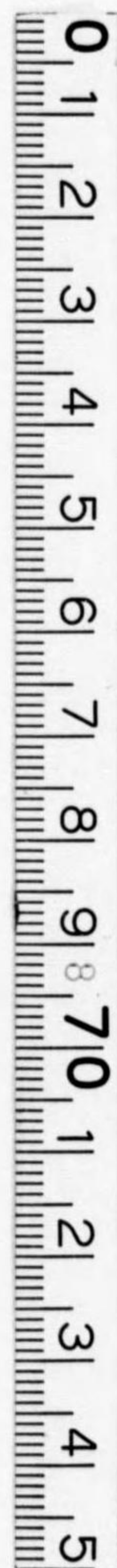
64-242



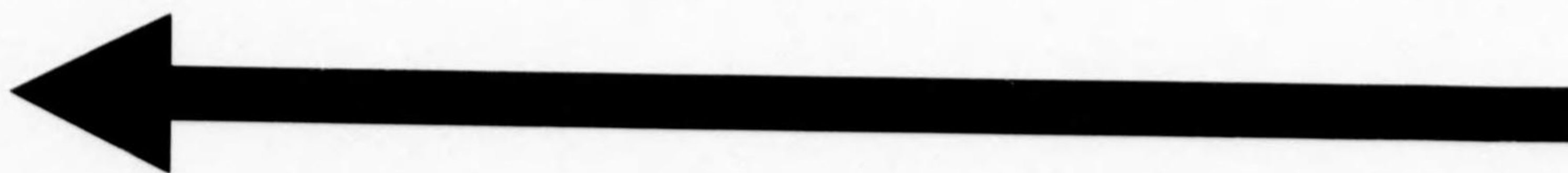
1200501278087

+

42



始



21 4F-92



岩倉具視
關係文書

第

四



64-242

岩倉具視關係文書第四

自明治元年六月
至同 三年十二月

目次

明治元年

一	岩倉具定同具經書翰	「岩倉具視宛」	明治元年六月一日	一頁
二	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年六月一日	四
三	櫻井慎平書翰	「岩倉具視宛」	明治元年六月五日	五
四	岩倉具視書翰	「吉井友實宛」	明治元年六月六日	七
五	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年六月六日	八
六	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治元年六月八日	九
七	名和緩書翰	「岩倉執事宛」	明治元年六月八日	一二
八	岩倉具視書翰	「中山忠能宛」	明治元年六月九日	一三



九	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月九日	一四
一〇	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月十四日	一四
一一	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月十八日	一六
一二	岩倉具視書翰	「松平慶永宛」	明治元六月十八日	一八
一三	大原重德書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月十八日	一九
一四	岩倉具視書翰案	「三條實美宛」	明治元六月十九日	二〇
一五	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月廿二日	二五
一六	岩倉具視書翰	「後藤象二郎宛」	明治元六月廿三日	二六
一七	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月廿四日	二七
一八	岩倉具視書翰	「大村純熊宛」	明治元六月廿五日	二八
一九	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月廿五日	三一
二〇	田中光顯書翰	「岩倉執事宛」	明治元六月廿五日	三一
二一	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月廿八日	三四

二二	大橋慎書翰	「岩倉具視宛」	明治元六月廿八日	三六
二三	岩倉具視書翰	「中山忠能等宛」	明治元六月	三七
二四	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月一日	四〇
二五	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月五日	四一
二六	岩倉具視書翰	「中山忠能等宛」	明治元七月十一日	四六
二七	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月十二日	四八
二八	岩倉具視書翰	「副島種臣宛」	明治元七月十三日	五〇
二九	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月十四日	五三
三〇	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月十五日	五四
三一	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月十六日	五四
三二	岩倉具視書翰案	「三條實美宛」	明治元七月十八日	五六
三三	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月十九日	五九
三四	中山忠能書翰	「岩倉具視宛」	明治元七月廿六日	六〇

三五	大橋慎書翰	「岩倉具視宛」	明治元年七月廿六日	六三
三六	岩倉具視書翰	「副島種臣宛」	明治元年七月廿七日	六四
三七	玉松操建言書	「岩倉具視宛」	明治元年七月	六六
三八	玉松操等建言書	「岩倉具視宛」	明治元年七月	六七
三九	嘉彰親王御書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月五日	七〇
四〇	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月六日	七一
四一	岩倉具視書翰	「松平慶永宛」	明治元年八月六日	七二
四二	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月六日	七三
四三	岩倉具視書翰	「嘉彰親王宛」	明治元年八月八日	七四
四四	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月十三日	七六
四五	小河一敏建言書	「岩倉具視宛」	明治元年八月十三日	七七
四六	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月十四日	八一
四七	嘉彰親王御書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月十七日	八八

四八	大原重德書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月十八日	九〇
四九	參考 大原重德書翰		明治元年八月十三日	九一
五〇	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月十八日	九六
五一	大原重德書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月十八日	九八
五二	中山忠能書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月廿日	九九
五三	岩倉具視書翰	「清水谷公考宛」	明治元年八月廿一日	一〇一
五四	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月廿一日	一〇三
五五	秋月種樹書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月廿二日	一〇三
五六	岩倉具視書翰	「參與宛」	明治元年八月廿五日	一〇四
五七	岩倉具視書翰	「嘉彰親王等宛」	明治元年八月廿九日	一〇九
五八	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年八月	一一〇
五九	僧某建言書	「岩倉具視宛」	明治元年八月	一一一
六〇	岩倉具視書翰	「諸侯掛宛」	明治元年九月三日	一一三

六一	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月四日	一一四
六二	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月六日	一一五
六三	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月六日	一一九
六四	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月七日	一二一
六五	片桐省介書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月八日	一二二
六六	岩倉具視書翰	「清水谷公考宛」	明治元年九月十七日	一二三
六七	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月十八日	一二五
六八	岩倉具視書翰	「中山忠能等宛」	明治元年九月廿一日	一二六
六九	岩倉具視書翰	「中山忠能宛」	明治元年九月廿一日	一二八
七〇	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月廿一日	一二九
七一	松平慶永書翰	「岩倉具視等宛」	明治元年九月廿一日	一三二
七二	松平慶永書翰	「岩倉具視等宛」	明治元年九月廿一日	一三五
七三	岩倉具視書翰	「大原重德宛」	明治元年九月廿三日	一三七

七四	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月廿五日	一三九
七五	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月廿六日	一四一
七六	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月廿九日	一四四
七七	香川敬三書翰	「岩倉具視宛」	明治元年九月	一四六
七八	大原重德書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月二日	一四九
七九	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月四日	一五〇
八〇	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月四日	一五一
八一	岩倉具視書翰	「德大寺實則宛」	明治元年十月十日	一五二
八二	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月廿日	一五五
八三	大橋慎書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月廿日	一五七
八四	伊地知壯之丞書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月廿七日	一五八
八五	大橋慎上書	「岩倉具視宛」	明治元年十月廿七日	一六五
八六	東久世通禧書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十月廿八日	一六六

八七	柏木總藏上書	「岩倉具視宛」	明治元年十月十八日	一七〇
八八	中山忠能書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十一月六日	一七三
八九	中山忠能書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十一月十日	一七六
九〇	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十一月十二・三日頃	一七八
九一	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治元年十一月十四日	一七九
九二	伊地知壯之丞書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十一月十四日	一八〇
九三	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十一月十六日	一八五
九四	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治元年十一月十七日	一八六
九五	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治元年十一月廿二日	一八七
九六	岩倉具視意見書		明治元年十一月廿二日	一九一
九七	中山忠能書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十一月廿三日	一九七
九八	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十二月	一九九
九九	大橋慎上書	「岩倉具視宛」	明治元年十二月廿四日	二〇一

一〇〇	岩倉具視書翰	「中山忠能等宛」	明治元年十二月廿九日	二〇三
一〇一	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治元年十二月廿九日	二〇四

明治二年

一	毛利元德書翰	「岩倉具視宛」	明治二年正月十日	二〇九
二	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年正月十四日	二一〇
三	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年正月廿六日	二一一
四	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治二年正月廿六日	二一二
五	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年正月廿八日	二一二
六	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年正月廿八日	二一四
七	岩倉具視書翰	「島津久光宛」	明治二年正月晦日	二一五
八	大橋慎書翰	「岩倉具視宛」	明治二年正月晦日	二一六
九	岩倉具視書翰	「嵯峨實愛宛」	明治二年二月三日	二一七

一〇	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年二月三日	二一八
一一	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年二月五日	二二〇
一二	廣澤真臣書翰	「岩倉具視宛」	明治二年二月十三日	二二一
一三	岩倉具視書翰	「橋壹岐宛」	明治二年二月廿一日	二二三
一四	嵯峨實愛書翰	「岩倉具視宛」	明治二年二月廿二日	二二四
一五	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年三月十四日	二二二
一六	松平慶永書翰	「岩倉具視宛」	明治二年三月十七日	二二三
一七	岩倉具視書翰	「木戸孝允・岩下方平宛」	明治二年三月十九日	二三三
一八	岩倉具視書翰	「木戸孝允等宛」	明治二年三月廿二日	二三五
一九	岩倉具視書翰	「中御門經之宛」	明治二年四月朔日	二三七
二〇	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月三日	二三九
二一	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月六日	二四一
二二	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月六日	二四四

二三	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月六日	二四四
二四	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年四月七日	二四五
二五	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月七日	二四六
二六	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治二年四月十三日	二四七
二七	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月十五日	二五〇
二八	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月廿三日	二五一
二九	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年四月廿七日	二五二
三〇	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治二年四月廿七日	二五三
三一	岩倉具視書翰	「議定・參與宛」	明治二年四月廿九日	二五四
三二	嵯峨實愛・岩倉具視連署書翰	「木戸孝允宛」	明治二年四月廿九日	二五五
三三	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治二年五月朔日	二五六
三四	伊達宗城書翰	「岩倉具視宛」	明治二年五月五日	二五九
三五	船越衛書翰	「岩倉具視宛」	明治二年五月六日	二六〇

三六	船越衛書翰	「岩倉具視宛」	明治二年五月	二六二
三七	東久世通禧書翰	「岩倉具視宛」	明治二年五月十一日	二六七
三八	岩倉具視書翰	「木戸孝允宛」	明治二年五月十八日	二七〇
三九	宇田淵書翰	「岩倉具視宛」	明治二年六月十三日	二七二
四〇	岩倉具視書翰	「三條實美等宛」	明治二年六月十四日	二七六
四一	宇田淵書翰	「岩倉具視宛」	明治二年六月十七日	二八〇
四二	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年六月廿日	二八三
四三	水野忠敬書翰	「岩倉具視宛」	明治二年六月廿二日	二八五
四四	松平慶永書翰	「岩倉具視・德大寺實則宛」	明治二年六月三十日	二八六
四五	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年七月朔日	二八八
四六	池田慶德書翰	「岩倉具視宛」	明治二年七月四日	二八九
四七	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年七月十日	二九〇
四八	大橋慎建言書	「岩倉具視宛」	明治二年七月十五日	二九一

四九	大橋慎建言書	「岩倉具視宛」	明治二年七月十六日	二九三
五〇	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治二年七月十八日	二九四
五一	大橋慎建言書	「岩倉具視宛」	明治二年七月十八日	二九五
五二	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年七月廿九日	二九七
五三	鷹司輔熙書翰	「三條實美・岩倉具視宛」	明治二年七月頃	二九八
五四	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年八月四日	三〇二
五五	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年八月十三日	三〇三
五六	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年八月十七日	三〇五
五七	中御門經之書翰	「岩倉具視等宛」	明治二年八月廿日	三〇七
五八	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年八月廿五日	三〇八
五九	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治二年八月廿五日	三一〇
六〇	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年九月二日	三一〇
六一	岩倉具視書翰	「德大寺實則宛」	明治二年九月十日	三一三

六二	岩倉具視書翰	「大久保利通等宛」	明治二年九月廿一日	三一四
六三	德大寺實則書翰	「岩倉具視宛」	明治二年九月廿三日	三一五
六四	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治二年九月頃	三一六
六五	大原重德書翰	「岩倉具視宛」	明治二年十月朔日	三一八
六六	宇田淵書翰	「岩倉具視宛」	明治二年十月十七日	三二〇
六七	岩倉具視書翰	「中御門經之宛」	明治二年十月十三日	三二二
六八	島義勇書翰	「岩倉具視宛」	明治二年十月廿九日	三二三
六九	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治二年十一月十三日	三二五
七〇	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治二年十二月三日	三二七
七一	岩倉具視書翰	「大久保利通・木戸孝允宛」	明治二年十二月十七日	三二七

明治三年

一	中御門經之書翰	「三條實美・岩倉具視宛」	明治三年正月九日	三二九
---	---------	--------------	----------	-----

二	中御門經之書翰	「三條實美・岩倉具視宛」	明治三年正月十三日	三三三
三	中御門經之書翰	「三條實美・岩倉具視宛」	明治三年正月十七日	三三四
四	岩倉具視書翰	「大橋愼宛」	明治三年正月廿二日	三三六
五	大橋愼建言書	「岩倉具視宛」	明治三年正月廿二日	三三七
六	大橋愼建言書	「岩倉具視宛」	明治三年正月廿六日	三三三
七	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治三年正月廿六日	三四六
八	蜂須賀茂韶書翰	「岩倉具視宛」	明治三年二月十一日	三四七
九	岩倉具視書翰	「吉井友實宛」	明治三年二月十四日	三四九
一〇	岩倉具視書翰	「黒田清綱宛」	明治三年二月廿二日	三五〇
一一	岩倉具視書翰	「佐々木高行宛」	明治三年二月廿六日	三五〇
一二	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年三月二日	三五一
一三	岩倉具視書翰	「黒田清綱宛」	明治三年三月四日	三五四
一四	岩倉具視書翰	「佐々木高行宛」	明治三年三月五日	三五五

一五	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年三月六日	三五六
一六	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年三月六日	三五七
一七	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年三月七日	三五九
一八	岩倉具視書翰	〔黒田清綱宛〕	明治三年三月廿日	三五九
一九	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年三月廿九日	三六〇
二〇	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年三月廿九日	三六二
二一	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年四月七日	三六三
二二	宇田淵書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年四月八日	三六六
二三	大橋慎建言書	〔岩倉具視宛〕	明治三年四月十二日	三七〇
二四	宇田淵書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年四月十三日	三七一
二五	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年四月廿日	三七三
二六	岩倉具視書翰	〔三條實美宛〕	明治三年五月九日	三七五

附 三條より岩倉宛裏書返書

二七	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年五月十三日	三七六
二八	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年五月廿日	三七七
二九	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年六月六日	三七八
三〇	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年六月七日	三七八
三一	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年六月十日	三七九
三二	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年六月十九日	三八一
三三	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年六月廿九日	三八一
三四	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年六月廿九日	三八三
三五	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月二日	三八四
三六	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月二日	三八五
三七	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年七月三日	三八六
三八	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年七月三日	三八八
三九	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月三日	三八九

四〇	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年七月四日	三九〇
四一	大橋慎建言書	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月五日	三九一
四二	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年七月六日	三九五
四三	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年七月六日	三九六
四四	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月八日	三九七
四五	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月八・九日頃	三九八
四六	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月九日	三九九
四七	大木喬任書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月九日	四〇〇
四八	大木喬任書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月九日	四〇一
四九	三條實美書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月十日	四〇二
五〇	岩倉具視書翰	〔大久保利通・廣澤真臣宛〕	明治三年七月十日	四〇二
五一	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年七月十二日	四〇三
五二	原保太郎書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月十三日	四〇四

五三	大橋慎建言書	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月十四日	四〇六
五四	岩倉具視書翰	〔大橋慎宛〕	明治三年七月十四日	四〇八
五五	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年七月廿三日	四〇八
五六	大原重德書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月廿八日	四〇九
五七	柳原前光書翰	〔岩倉具視宛〕	明治三年七月廿八日	四一一
五八	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年八月三日	四二四
五九	大橋慎建言書	〔岩倉具視宛〕	明治三年八月九日	四二四
六〇	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年八月九日	四二七
六一	中御門經之書翰	〔三條實美・岩倉具視宛〕	明治三年八月廿日	四二七
六二	岩倉具視書翰	〔黒田清綱宛〕	明治三年八月廿七日	四二九
六三	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年九月二日	四三〇
六四	岩倉具視書翰	〔大久保利通宛〕	明治三年九月四日	四三一
六五	岩倉具視書翰	〔佐々木高行宛〕	明治三年九月五日	四三二

六六	英國公使「パークス」書翰	「岩倉具視宛」	明治三年九月七日	四三三
六七	岩倉具視書翰	「中山忠能等宛」	明治三年九月八日	四三五
六八	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年九月九日	四三八
六九	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年九月十三日	四三九
七〇	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年九月十六日	四四〇
七一	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年九月十七日	四四一
七二	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十月五日	四四二
七三	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十月十四日	四四四
七四	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治三年十月十五日	四四五
七五	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十月十七日	四四六
七六	西四辻公業書翰	「岩倉具視宛」	明治三年十月廿七日	四四八
七七	岩倉具視書翰	「佐々木高行宛」	明治三年閏十月五日	四五〇
七八	岩倉具視書翰	「三條實美等宛」	明治三年閏十月十三日	四五〇

七九	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治三年閏十月十七日	四五二
八〇	吉井友實書翰	「岩倉具視宛」	明治三年閏十月廿六日	四六五
八一	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十一月十三日	四六八
八二	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十一月十五日	四七二
八三	岩倉具視書翰	「黒田清綱宛」	明治三年十一月十五日	四七四
八四	嵯峨實愛等書翰	「岩倉具視宛」	明治三年十一月廿四日	四七五
八五	河田景與書翰	「岩倉具視宛」	明治三年十一月廿六日	四七六
八六	前田慶寧書翰	「岩倉具視宛」	明治三年十一月	四七七
八七	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十二月十日	四七九
八八	岩倉具視書翰	「大久保利通宛」	明治三年十二月廿日	四八〇
八九	岩倉具視書翰	「三條實美等宛」	明治三年十二月廿一日	四八二
九〇	岩倉具視書翰	「中御門經之宛」	明治三年十二月廿一日	四八四
九一	岩倉具視書翰	「島津久光宛」	明治三年十二月廿四日	四八五

- 九二 岩倉具視書翰 「島津久光宛」 明治三年十二月廿五日
- 九三 岩倉具視書翰案 「薩長藩宛」 明治三年十二月下旬

四八八
四八九

目次終り

岩倉具視關係文書 第四



岩倉具定具經書翰「岩倉具視宛」 明治元年六月一日

願上 此度は知光院宛へは別段書狀も不差上候間宜しく此書狀之趣御申上

追々甚暑相催候處御内御一統益御機嫌克御揃被爲遊恐悅欣喜不過之奉
 存上候祖父君には不相變日夜之無辨御繁勤被爲在候趣格別之御疲れも不
 被爲在實に恐悅安心此事に奉存上候隨而私ともにも誠に無事罷在候間乍
 恐御安心之様奉願上候家來栗園始め一同無事罷在候間當地之處は決而御
 心配無之様偏に奉願候上過日香川敬三上京致し候皆當地之處も何か不安
 風説も有之種々心配も仕候へとも先今日にては誠に御靜謐實に安心之事
 に候去月十五日には江戸上野と申大きな寺有之此所に賊兵一萬人計入

込居候て市中を亂横し候に付御追討被爲在夫々誠にしつかに相成り、私共は本丸をやぐらにのほりさしわたし五六丁之處故軍さの模様も能々相見候實におもしろき事に候大きな堂など澤山見へ居候處しはらく之間に火盛んにもへたち其間には大砲小銃之音もきこへ折々流丸も参り誠に近きところゆへおもしろき事ともに候扱私とも兩人先達而東山道先鋒總督被免此度あらためて奥州羽州追討之總督被仰付誠に難有事に候實にむつかしき御役にて恐入候得とも兼て段々願入置候に付早速御請申上候此度は眞に軍もいたし候心得に候御前方には定めていろと御心配被遊候事と存上候へともなか、鐵ほふと申候ものは容易にあたり候者には無之天命ゆへ決々御心配不被爲在様夫のみ願上り、先仙臺會津をはしめ五六十之大名をほろほし候事故急々には六ヶ敷候へとも何れはことくほろほし候はては決して歸京は不致候間此義は御心得被爲遊候様願上り、もとより京師出立より如何様之義有之哉

も難計は御承知之上の事に候間必御安心被遊候様願上候未何日頃出馬と申事にも不決候へとも何分一日も早く出陣致度存日、相たのしみ相待居候事に候必しも仙臺と會津之首を持かへり不申候ては歸京と申事はむつかしく候間今暫く御まち願上り、小野熊三郎義も大におとなしく相成日、やかましく申居候事に候同人も奥羽へはまゐり度との事にて鐵砲などほしきよし早速とのへ遣候心得に候實に私之家來一同いくさのみをたのしみ居候間此度は嘸々おもしろき事哉と實にたのしみ居り、兩三日前に三四郎與惣吉等かへし本人には大に残念之様申居候へともむりに此度は歸京申附候事に候私共之義も此兩人に御聞取被遊候はよく、御分り被遊候間御聞とりの事と存居り、書狀計にてはうそなどを申上げ候様にも被爲思召候も難計候へとも決而相違無之事に候此度は又、香川にも上京致し候事故あら、申上り、くはしき事は同人より御きゝとり願上り、早々めてたくかしく

六月一日

右 督 様

横 山 殿

奥羽追討

總 督 様

二 松平慶永書翰 [岩倉具視宛] 明治元年六月一日

一輪奉拜啓候先以御清安珍重奉存候陳者容堂へ退 朝直に書狀遣し候處
即答別紙之通りに御座候明日は必參
朝可仕候間何卒早々議定被
仰付にいたし度奉存候一寸此段申上候
御繁中御斷申上候也

六月朔

慶 永

右 兵 衛 督 殿

尙任序奉申上候雪江々奉申上候永平寺一件何分宜奉希候且又藤堂藩

瀬日懸と申は西洋器械に製作頗相長し候者に候右仁京坂に居候趣承
候是等早々御用被
仰出候は、至極之御都合可相成と存候以上

三 櫻井慎平書翰 [岩倉具視宛] 明治元年六月五日

謹る奉申上候過日嚴命を蒙下坂仕着坂懸け宇島候へ謁し尊命之次第巨細
相達申候折柄宇島候御上京御決に節角御乗船之御模様候間最早
御面會被爲在候御事と奉存候二に洋醫御雇入之儀外國局後藤其外内々御
示談仕候處皆々感腹仕早速彼の局におひて周旋仕追可申上都合に仕置
候事三に奥羽之賊魯西亞と聲息を通し應援之有無象次郎其外見込之處承
り合候處萬國公法を以御和親被爲在候事故魯西亞一國之敢私する事不
能處に萬々掛念有之間敷乍然探索之儀は精々勉勵仕更に其次第彼局々
是亦言上仕候様相約置候事四に尤至急之軍艦蒸氣船之一條着坂即刻より

(櫻井慎平、
名は直義山
口藩士、當時
軍務官列事
たり)

兵庫港申合精々盡力仕候處未た十分を得不申日夜痛心仕候其内土州夕顔と申蒸氣一艘紀州蒸氣一艘右二艦阿州の差向最早兵庫港揚碇阿波の航申候次に長州勢三百人餘脇坂艦の今晚乗組明曉當港發港仕候肥後兵隊之儀は手船今明日之内着港之様子に相聞申候猶又兵庫におひて異艦一艘來る七日迄には御買入之分手に入候都合に相決候間此分を引當仕置候更又今日江戸港の一艘寺島秀之進其外乘歸り候分凡百五拾人乗位之艦を得候間會又引返し關東へ差下候様仕肥後之引當に仕候左候得は肥後一手も不日出港仕候其餘は只今迄に引當無御座候得共追而相調候上言上可仕候五に關東港の碇泊艦之當港の一先差歸候儀次に肥前兵奥の松島へ操込候間江戸の機會を不失援兵操出し一條猶又兵隊大舉關東へ被差向候等之件々大村益次郎迄明曉揚碇之便を以巨細申越置候然處今夕益次郎の別紙之趣申越内外御案合之御策奉感服候則別紙尊覽に備候様益次郎も申越候間奉呈上候尙此餘は追々奉言上候誠恐誠惶謹言

六月五日

櫻井 慎平

亥の刻認

再 拜

岩 倉 殿

閣下

四 岩倉具視書翰

「吉井幸輔宛」明治元年六月六日

一筆申入候別封櫻井慎平の申來候間入御廻覽候尙御一見後御返却頼入候外に越前卿の一封是亦不規律哉と存候定る軍務官に於る御取調可有之尤差支りも有之候は、改而辨事を布告可申附哉禁中に於ても自然御尊可有御座哉と案申候右貳廉請御賢考候草々頓首

六月六日

對 岳

吉 井 殿

○編者註
「別封云々」
は前書を云
しへるなるべ

五 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕明治元年六月六日

一 翰令啓上候嚴暑之候御座候處先以
皇上益

御機嫌能被爲入奉恐悅候隨而閣下愈御清安珍重存候扱一昨夜亥刻頃北之方へ相當り小銃數聲相聞戰爭かと衆人生疑感別る心なき者は恐縮仍而早々探索爲仕候處右は白川土佐屋敷銃炮稽古連發之趣に御座候弊藩警衛境町御門へも相聞同所かも探索爲致候所相違無之趣に御座候何卒銃炮稽古ならば晝の内にいたし此節柄人心を驚動仕候儀如何哉に奉存候尙又御探索御取調之上以來夜中之發炮稽古無之様被仰出候儀々と奉存候例之輕忽恐入候へ共任心付奉申上候尙期明日之拜顔候也恐惶謹言

六月六日

慶 永

右 兵 衛 督 殿

六 岩倉具視書翰〔三條實美宛〕明治元年六月八日

天氣平穩恐悅御放念是祈候尊公にも彌御安泰御滞在欣喜候御東下後は眞に千辛萬苦被遊終に上野賊徒も一戰大御勝利爲天下奉賀候乍去爰に到り候迄之御苦慮いか計と不堪想像程之御事と存候此節少々御不例之旨御持病歎と存候へ共爲朝家御自愛專一に存候
一 五月十五日御書中并日誌等拜見追討如何哉と日夜心痛罷在候處廿九日迄海陸共に一の御音信なく眞に寢食不安一同只々如何と申居候處廿九日始る御捷報有之再生之心地致候事に候暮々御配慮御盡力之程奉遠察候事に候

一 高橋熊太郎片岡源馬西郷吉之助香川敬三等何れも上著御書類も夫々拜見御傳言も拜聽候明日か明後日に香川發足其砌一々御返事可申入候
一 關西總而無異御安心之様に存候
一金策も追々相立月中に二十萬位は必無間違事に候此比に三萬兩是は最早や著の管

又十萬金差送り候事に候

一 奥羽之處も是より事始り如何と案し申入候弱敵とは存候得共輕侮すへからず薩には歸國大兵を擧て直に海路より江戸へ出候て夫より奥羽へ出行之旨なり昨日歸國致候筈に候長にも二大隊出張致し候肥前には大憤發大兵を出し全く舉國御奉公之事に候皆以副島大木江藤等之大盡力に起る事歟と感伏之事に候御心得に而肥前侍從始同藩人へ能々御依頼之事祈り候一秘密云々此方にて既に決し平天下之策此外なくと存込萬事決策候得共一應御打合と存候而香川へ内々申含差返候處片岡來り曰く尊卿よりも秘策云々東西合策恐悅此事に存候處昨日香川上著に而九月頃迄云々承り亦再考如何と存候事なり乍去大久保一藏承知に而參府候此比は定而御面會と存候尙御内評早々御申越可給候長門宰相にも此暑天之折柄と申會計と申色々掛念之論に候亦容堂にも彼是風聞承り候とて小子へ尋問全く奥羽鎮定直々と申見込と被存候閑叟には是非此機會と申居候

事に候

一 愚兒孫段々御世話恐入候兩人小兒同様之者差出候趣意は元來戰場實地御用爲相勤度存候得共左様にも不參一同かばひ吳候趣辱くは存候へ共有名無實と存候左候は、屹度諸軍總督出來候年輩之者被命候方可然と存候仁宮にも奥羽遊撃之命を蒙り度と類に御内願に候又々御勤考之儀と存候兩人之子供段々厚く御世話實に恐怖仕候何分にも御見受之通不都合極り仲間付合も無禮多からんと類に懸念候事に候御子息と被思召屹度御叱責之上御使ひ被下候は、自然事柄も覺候事と存候吳くも宜敷願上候

一 何分明日比香川發足之節細しく御返事申入候只今辨事より日誌はしめ色々爲持上候との事任便荒々言上如此候也

六月八日

尙々大久保著候は、一應來狀之様恐入候得共御傳言願上候也

三條左大臣殿

具 視

七 名和緩書翰「岩倉執事宛」明治元年六月八日

今曉浪華着直様後藤の件々及談判候處第一洋醫招請之儀既に右手求見候得共至る六ヶ敷其所以んは當時大坂神戸間醫者少く大概横濱へ参り居残り居候者は軍艦醫者に規則上に於ても上京難出來尙眼前艦中に亦も病人有之と申次第今朝又々後藤家來差遣候由ミニストルに應接振同様之儀夷人に於るも兼有有名之諸侯故差出候得共不任心底段申斷候由に御座候今一應盡力振も可有之哉十に八九は事不成と相見申候尤侯下坂之上は軍艦醫に亦も見廻り候様子外に容體書も有之候へは配藥之工夫可仕と申事に御座候第二秘密策金談未だ三岡へはかれ不快故不果面話候得共後藤口氣上外國借入金月に五十萬ドル之當りを以既に右丈は手に入り器械渡來を待兼既に製造局取立候近日常吹立候よし器械も廿日頃には渡來可致

哉随分關東之御入費御間に合可申との口氣しかし篤と取究歸京之上可申上候其砌は餘波耳差急き呈上 輔相公の宜敷被仰上可被下候草々頓首

六月第八

八 岩倉具視書翰「中山忠能宛」明治元年六月九日

一山科泉山

片時も早く御参詣無之は實に御不都合之旨頻りに責め候もの不少亦大坂に被

仰出も候事に候へは尤に候會計嚴重御催促可給候

一次鳴御参詣之事元々眞に思召に被 仰出候事速に 叡慮通り致し上度事と存候

一秋月之事月中六ヶ敷先被 仰付候様奉存候右早々如此候也

六 九

九 德大寺實則書翰

〔岩倉具視宛〕 明治元年六月九日

關東より申來候貢士三四名御差下之事議長坂田秀人撰命し候處即別紙
之通差出候間入高覽候猶御賢考明日可相伺候

一同彦藩士鎮臺府權判事はは明日留主居を招可申渡と存候

一松尾伯耆以下四名御役 免加書付先時差上候定而御落手と存候

右條々申上度如斯候也

六 九

岩倉賢相公閣下

實 則

一〇 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治元年六月十四日

三白民部大輔水戸相續之義御高論之趣御尤に存候水藩國情之處是亦

不得止次第とも存候何分御熟議之上御沙汰奉願候

酷熱難耐候時節

聖上御勇健被爲成恐悅無限奉存候尊公各位益御清壯御勤務奉大賀候

小弟無異罷在乍憚御放念可給候當府先以無事平穩御安意奉希候奥羽是

亦變動無之候扱今般水戸家來之者歎願之爲上京仕候委細御聽取之上可

然御沙汰奉願候

一 水藩在京之者より

京師御守衛之爲人數差上し候様段々申遣し候由然に水藩も殘破之國情

疲弊も難堪姦徒脱走之輩誅伐之爲兵隊も多分繰出旁人數上京之義十分

に難届乍併人數をも不差出候ては對

朝廷不相濟諸藩之嫌疑も難解甚心痛仕候由に承候 小弟答に何分姦徒誅

戮反正之實効相立候義も急務に候

京師に人數差出候義延引相成候迎

朝廷に於て御不審も有之間敷候間速姦徒掃討可然相答申候決る異心有之候筈も無之候間御疑念無之様御取成可給候何分國情不得止候次第御諒察被成下可然存候

先は要用而已書狀を以拜啓如此御座候猶可然御取計可給候頓首敬白

六月十四日

實美

岩倉殿

机下

二 仲炎暑難凌折角御自愛奉祈候以上

一一 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年六月十八日

一 翰奉拜啓候云々暑中此一兩日朝夕は別る爽涼雖日中凌能方に御座候如此時候には風邪下痢等往々有之別る此兩三日參 朝不仕候故頻に 玉體御案申上候何分御障り不被爲在候様致度御内々閣下迄御様子相伺申

候乍恐御格子後此涼氣中は御夜衾等御重ね被遊御風邪御下痢等御感し不被遊様乍婆情 君側之者御手當申上候様仕度候是等甚以愚昧之申上方に候得共婆心御案事申上候餘任御懇厚閣下迄奉言上候兩三日不得拜晤候に付愚衷陳啓且御見舞申上度如此御座候書外期不日之拜晤候恐惶謹言

晚夏十八日夕第一字

慶永

輔相岩倉公閣下

尙々云々扱は先般被 仰出候越後口出兵之儀當月十一日〔香川の〕 日夕刻指出候家來二人十三日夜著然る處過日雲江より奉言上候通り越前守海浴罷越居候〔城下より五里三國港邊〕 に付其趣申遣十五日福井へ著可仕由申越候家來始其後出立十五六日比著可仕歟何分追々先鋒出張之手筈に相成趣申遣候其後之便は以日積考候へは一兩日中には國便可有之と存候越前守も手足餘程痲痺起居六ヶ敷由乍去此度之 朝命之事故是非々々出馬之覺悟に 而當時専ら療養中に御座候由何分にも段々都合宜趣に御座候間御安慮

奉希候御承知之通り小拙せつかち故日々飛脚差遣候事に御座候彈藥之儀も乍残念軍務官を達遅く去る十五六日比御達故早々申遣候へ共日積考候へは兩三日には御請可申來と奉存候色々右等之苦心仕候得共段々小生存慮貫徹可相成様に奉存候尙追々申越候は、又々可申上候也

一二 岩倉具視書翰「松平慶永宛」 明治元年六月十八日

拜承先以 至尊益御機嫌能被爲渡恐悅奉同賀候即今時候冷熱去來之砌玉體之御興居御懸念被申上候段縷々之御至情臣子之精忠紙上に溢れ不堪感佩候乍恐 御青年被爲渡諸事御勉強中々老婆之非所及窃に奉感泣候事に候乍併御案事被申上候邊はこの御直書直に入 天覽候半定而 御満足且 御意被爲用候事と奉存候過日土老洋醫之事御申上之處其至情殊之外御満足臣等も眞に感喜之事に候扱賢臺此間來御不參近況如何哉と案居候處果して然り最漸々御復常に至り候御様子承慰鄙想候尙亦北越口進撃苦

戰に付令息君御出馬相成候は、實に天下之大幸不過之と祈念罷在候處御末毫之趣にやは頃日は已に先鋒隊戰地へ著一戰にも可及不日勝報可至と覽望仕候畢竟賢臺御精神之所徹鬼神も避之道理御一藩之革面驚感候實は昨今頻に懸念之風聞も有之處懇々華牘別放念仕り不淺拜讀仕候右は御請迄如此に候也

六十八

對 岳

春 岳 老 臺

とけぬれは解にけるかな夏來ても照るよそ峰の越のしらゆき

一三 大原重徳書翰「岩倉具視宛」 明治元年六月十八日

尙々刑法御用早く相濟候は、參

朝可仕候へとも迎も早くは濟間敷と存候間本文之通令言上置候也

秋暑難凌候愈御平康奉賀候陳者昨日歸京に付可得拜談心組に候處行違御

退出に相成不得其儀候右は種々有之候中にも差當り候儀林左門知縣事に被遊候様懇願仕候勿論事情巨細拜顔ならては不相叶候右差當り長谷部何某知縣事被 仰付も有之候事故に歸京早々不申上ては相叶はぬ事に候故先書中に申上候尤今日は御承知被爲在候通り刑法官へ出頭仕夫迄に玉手鎮次郎參り御參朝之内出頭仕候儀にも難相成又刑法官之御用も速には難濟と存候間歸路に出頭巨細言上仕度存候何れ申越にも可相成と存候若御退出前に候は、御請可申上と存候間先此段及言上置候早々如此候也

六月十八日

岩倉 輔 相 公 格 下

重 德

一四 岩倉具視書翰案

〔三條實美宛〕 明治元年六月十九日

酷暑之節

皇上益御機嫌能被爲渡奉恐悅候次 尊公御安全珍重存候其地之義段々御

勵精御苦勞存候追々平定之道に相運ひ恐悅之事に御座候全御勉力之程感銘仕候扱御示越之趣以ケ條御答且御打合申入候

一 御任槐御固辭無餘儀相伺候得共何分押る再被 仰下候間更に申入候於江戸は百里外の地臺職に被爲在候得は自ら 朝威も相耀候事故以上は御拜任所祈願候

一 八州鎮將の事も追々評議有

同鎮臺 知恩院宮

八州大監察 尊 公

右之通可被 仰出當地多分の論に候間御打合申入候被 仰出候は、乍御苦勞何れにも御請御盡力所願候

一大總督宮以下江戸開城上野賊徒退治先追々鎮定候形にも有之候間此頃海山兩道總督計歟各海道筋々凱陣尤關東守兵は其儘留置督府護衛兵計隨從有之候方可然歟於四條も同斷と存候右等之處篤と御考慮御見込之

所承度存候

- 一 上野増上寺儀は徳川氏代々靈舎も在之事右は龜之助へ可被下敷之儀右は被下と相成候は差支筋も可有之故徳川支配とか又は何々を支配とか被 仰付候方にも可有之歟議論御座候御賢考可給候
- 一 毎月金廿萬兩つゝ來月一ばい之處於會計官受合に相成候間御休慮可給候
- 一 ドル月々五拾萬ドル借入相調ひ當月を鑄立候運ひに相成器械も取寄申候都合に御座候
- 一 輪門行衛精々御搜索之由
- 一 上にも甚御懸念被遊候事故此上猶又御探索願存候
- 一 水野出羽守儀は御所置振一々御書付給御打合御座候様致度此段希入候
- 一 伯耆對馬兩人之事は御申越之通於其地御申付可給尤參與御免御書付は疾に差出申候

- 一 薩肝付七之丞は御登用有之候可然人體之由に御座候
- 一 關東鎮臺大總督宮以下御書付之事承候右は篤と御取調之上次第を被立候御申越被下度願存候
- 一 知恩院宮關八州及び奥羽は管轄可有之於北越は當地政府を取扱可然と存候尙賢斷承度存候
- 一 大總督宮以下歸洛は先平定に付自分歸京歟或被召返候筋歟且御賞は歸洛之上可被行と存候此段御打合申入候
- 一 靜寛院宮御上京の事
- 一 御本人御趣意實に御尤感服なから兼御降嫁前
- 一 山陵御參拜以下先朝段々御約之趣も被爲有候儀且は久々之御事 山陵御參拜被遊

上御初大皇后敏宮にも 御對面被遊度旁以是非一應御上京天下太平之後更に御來歸龜之助御保佐被遊候得は實に重疊可然と奉存候此段御打合申

入候且御迎は大總督以下歸京之便御歸京候は、御迎にも不及便宜と存候
一米穀不足當分御當惑之由右は相廻し申候間御休念可給候
一十日十一日海路を奥羽へ御進軍の事御大事之事と存候御慢無之様十分御用心專一存候

一東山道總督兩人之處別に於

朝廷御沙汰有之筋には無之親子之情を申遣候事にも實は其地方上京之人申唱候趣も有之於當地も會計邊其他迄も承候事も有之候間小生を爲心得申遣し候事に御座候間其邊御承知被下候尙當地之處以後能々爲相合候間其地之處何卒可然願存候

一當分寺社以下三課以姑息御施行之事實に穩當御尤に存候可然所祈候

一橋本之處御用も無之故軍務官へ可相用と存候一應御打合申候

一東西彌心配無之様の事

一三卿領地之儀は以使願出候上御所置可有之於旗本は上京候分は本領安

堵被 仰付候在江戸候分は於其土御取扱給候可然と存候

一此度御内々被 仰含木戸大木兩氏下向之儀は實に至重至大一大事と存候其機に後れ候はは大失策と存候尤御談決之上は寸刻も早々歸京被仰付候様致し度存候

一此狀中ヶ條於兩士も心得居候間御不審之廉は御尋可給候

先は右之分拜答仕候多忙他筆御斷申入候心事難相盡若漏洩も御座候歟此段御仁恕奉仰候勿々恐惶頓首再拜

六月十九日

具 視

三條輔相賢公

二白時令御保衛、

尙々紀州邸徳川へ被下候儀委細承候也

一五 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年六月廿二日

過刻は於宮中得拜顔大慶爾來愈御清安奉拜賀候扱今夕慶永歸邸仕候處一昨日弊藩急飛晝後到着右は弊藩先鋒兵隊一兩日之内出陣之旨申越誠に以大安心喜悅之至奉存候

閣下にも深く御配意被成下候儀に付昨夜中不取敢奉申上候尙明日參朝萬々可申上候也恐惶謹言

六月廿二日夜第八字

慶 永

輔相岩倉公閣下

一六 岩倉具視書翰〔後藤象二郎宛〕 明治元年六月廿三日

彌御清榮御奉職之事爲天下欣然候陳陽之助上京之砌御申越之件々承知委細申含歸坂之事に候定而御承知給候義と存候就中府中之體裁行政議事之振合云々素り御委任之事尙拙生其外同論に候に付旁可然存候并門下生附屬吏云々は亦貴兄傑眼之所決敢る非所妨乍去將來之規則とは不相成其人

其任に當り於時被差許候次第此余は陽之助口頭より御承知可給候其内爲朝野御周旋是祈仍早々不備

六月廿三日

二白寢床垂張何卒早々御廻し之様陽之助へ御傳聲頼候外に門脇へ申置候領地旗本始取調へ帳明日可相廻と存候與力同心品等之事いまた不分只今之通只々府兵に而は如何と愚慮候而已何れ議事之上可申入候也

六 廿三 二字

岩倉右兵衛督

後藤象次郎殿

平安

一七 德大寺實則書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年六月廿四日

岩輔相公閣下

實 則

昨烏御命候三條より書狀類令返呈候且大總督宮返翰は正三卿被認候間今暫見合に残し置候昨夜は參上久座甚恐怖數々御馳走拜嘗深畏入候御世話恐入候仍急々如此候也

六月廿四

昨夜御話御心配之一條於會計官都合出來之由過半安心之姿に候委曲中御より承候

一八 岩倉具視書翰

〔天村純熙宛〕 明治元年六月廿五日

炎熱難去愈御安康可被成御健食欣喜不斜候陳は此度至急に參與副島次郎を以申入候儀は東北殘賊固結王師に梗衡し蒼生塗炭に苦み朝廷至仁好生之思食も所詮貫き兼乍此上恩威並行不申亦は一定に不至加之薩長多年之精忠不俟論といへとも動もすれは兩藩之私なと、相唱へ人心を蟲惑せしめ歎息之至に候仍亦御隣藩鍋島之儀當時君臣共に英名天下に鳴る而して

今日朝廷上に在て其盡力無所不至彼をして大舉一方に當らしめは一つは以て賊膽を挫折し二つは以て朝廷之政權を輝し尙薩長之私なきを示す就中貴藩之儀は兼亦一般勤王之素志徹上加るに人材鬱出練兵整頓如此皇國危急之秋に當り全力を被盡闔藩御奉公有之度尤希望之至に候就亦は今般鍋島一同精兵千人丈何時にも繰出相成候様至急御用意有之度尤公然たる御沙汰は追亦可被仰出候に付其節は分寸を争ひ候機會故今日より速に萬端御豫備解纜之御手都合有之度劣生より先以内達申呈候尙要務之件々一二左に記す

一出兵方向之儀は越後海岸と相決御國元より直に乗船解纜之廟算に候尤方略等は追亦可被仰出候事

一當春來處々御勤勞不少御國力疲勞も可有之哉今度出兵千人之所は軍費金相應可下賜に付彈藥等之儀充分御用意被成置度候事

一參謀一人監察二人使役三人位御家來中において御人撰有之度追亦朝廷

より公然可被命候事

一 民政向巧者之人體御家來中にて兩三名御撰舉之事

一 醫師一人同斷

一 艦之儀當時東北往返彼是第一之不如意に付副島次郎御熟談之上隣藩向へ御談判被成下候様專希々々尙當地に於ても精々用意可致心得に候事右は未だ御發表不相成朝廷上之密算に付滯京之御家來へは別段内意不被仰付候間右様御承知可給候心緒溢筆之非所盡縷々副島口頭に附托し候間萬御洞察是祈候猶期後鴻候勿々以上

六月二十五日

具 視

大村丹後守殿

二 仲幾重にも重大至急之事件深思食も被爲在候儀に付御一藩貫徹候様御盡力所祈御座候尙生來之拙筆加るに痛腕を患る故に失敬ながら豚兒代筆申付候間御推讀可給候也

一九 伊達宗城書翰

〔岩倉具視宛〕明治元年六月廿五日

態々貴答被下忝夫々敬承仕候扱弊藩兵隊近日廻着可申哉明後日 御沙汰可被下旨畏入候兵隊は當月初旬申遣候處此間も粗及御内話候通弊藩論は逆も仙臺説得は出來間敷と評議故兵隊も不相廻心得と申越候に付廿三日尙又急檄にて申遣候唯當惑は兵隊乘廻且宗城東下可申瀛船更に無之事に歸着仕尙明後參朝面盡候勿々頓首

六月念五

宗 城

輔相公閣下

再奉復

二〇 田中光顯書翰

〔岩倉執事宛〕明治元年六月廿五日

酷暑之節各賢益御壯健可被爲成御精勤奉恭賀候然此一封甚以奉恐入候

岩倉具視關係文書第四 (明治元年六月)

三十一

得共内々、老公様へ奉差上度奉存候間可然様伏る奉願上候尙委細は上京之節可申伸右御頼申上度勿々如斯御座候恐惶謹言

六月廿五日

顯助

岩倉様御内

御執事中様

謹て竊に奉言上候先頃參 殿之節内々奉窺候義も有之過日大橋慎三急速上京仕候様之御内諭も拜承仕且此頃乍恐宿疾も聊快氣に移り候に付上京仕度心得に罷在候然る處臣曾る飄泊中赤馬關に在るや三年伊藤俊介之家に食客たり今や又病を抱き來る同人之家に投し幸に舊病を治するを得たり然るに伊藤當時兵庫之縣知事に實に吏事繁雜更に寸隙無し因る臣を驅使し追々一小吏に亦も爲し其煩勞を分たんとするの氣あり素より決し此事を臣に不語といへ共臣若し此地に今暫く淹留する哉必抑止せら

る之勢あり一小吏は臣之敢る非所好然るに近日臣に告て曰く西ノ宮驛出張之吏ありといへとも民政不行届にて無頼之徒抑壓する事不能因る旬日之間彼地に至り鎮撫し呉るへしとて丁寧反覆被相頼實に於私情は前文奉申上候通いなみかたく候得とも不得已京師之處は軍務官管轄中に有之其上病氣養生御暇相願滯在中且 殿下御内諭も有之色々上京不仕るは不相濟段申辨し候得とも色々申掛け甚以當惑仕候誠に以奉恐入候得とも幸に 殿下執事をして一封之書を下し賜はり臣を上京仕候様被爲召候得は實に重疊難有仕合臣之幸甚何加之然る時は早速上京仕乍恐於大政も聊か奉言上度儀も有之其他萬々臣之素志を訴る處も有之候に付何卒心精諒察を被遂歎願之次第御採用奉伏願候近日俊介上京仕候様子に御座候素より奉申上候も乍愚臣より此事歎願仕候儀決し不洩様是亦奉願候實に私情に泥滯し立去難き場合幾重にも御憐察奉願候萬縷歸京參殿之上可奉言上存候誠恐惶頓首謹白

六月廿五日

田中顯助

岩倉公殿下

執事御中

二一 三條實美書翰 [岩倉具視宛] 明治元年六月廿八日

大暑之節

主上

大宮益御機嫌能被爲渡恐悅奉存候尊臺不相變御勇健晨昏御勉勵奉感佩誠以欣喜之至存候當府無事御休念可給與羽追々進擊屢勝利實天威之然らしむる所雀躍無限候兵士益憤勵敵愾之氣倍盛奉慰宸襟候段國家之大幸に存候扱木戸大木兩士東下御内命之趣委細拜承乃同人之愚意申合御答申上候宜御承領可被下候御東幸之義實千載之大機會不可失此上は速に御發表奉待候足下御苦慮御竭力之程遙察仕候就るは甚乍



越俎愚意并光德卿心付之廉別紙書付差出試候御取捨可被下候誠方今諸國共實に疲弊極候間御道中之義余程御嚴命を被下可然人體は萬事周旋不被仰付候は必らず御仁恤之御趣意徹下仕らすしらぬ所に民間之疾苦を生し候間舊弊御洗除は勿論能々御氣を附られ願くは

鳳輿之御再過を仰望仕候程に御仁恤被爲垂候様不堪至願候猶御留主中御懸念も可有之候得共貴君に於は

上之御左右を不被爲離御供奉是非奉願候御留主之處は正三徳大寺越前等御委任相成京中市民兇暴之盜賊杯に困しみ候様之事無之機嚴重に御取締有之候は、可然奉存候猶御東幸之上大に

皇基を被爲建萬世不拔之帝業を被爲開候御大略に於るは少か愚見も有之候間拜面を期し御熟談可仕候實に此度之御盛舉僕等積年之微志成就之時至候事と竊にうれしく存候於

朝廷余程御變革御一新にも相成候趣には承候得共俗論無とも難申嘸々御

骨折御配慮之事と奉察候心事萬縷難盡筆頭荒々閣筆仕候餘木戸方御直聽可給候勿々敬白

六月廿八日

實美

輔相公閣下

二白時下不順爲國家御自愛奉祈候大亂書高免可被下候也

別封江戸名所繪本一箱不苦は進獻供 天覽度宜御披露奉願度候

二二 大橋愼書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年六月廿八日

恐懼謹白過日も卒然妄言拜呈奉恐縮候 愼何分にも歸京以來所勞に引籠り曾る參殿も不相整奉恐入候就るは養生御暇願出下坂仕度候而軍務官へ願出候得共御免無之甚た難澁罷在候其上 勅使平松殿東下之趣に候處是非とも連れ行くとの勢扱々困入申候 愼惟るに正々堂々之 勅使に陪從仕候とも更に益なし徒に僻地遊覽之爲め而已實に無益也仍る飽迄も固辭し

宿痾を養ひ都合に寄り而は北山に塾する之積りに御座候どふありても 勅使に陪從東下は仕らぬ心得に御座候 殿下以而非と思召すや又是と思召すや若し夫三軍を叱咤し而強賊を誅するに陪從せよとの事なれば敢而 不辭候得とも此度之儀は否や 〱に御座候宜御憐察奉祈如此候也冀は序を以執達せよ誠懼稽首敬白

六月念八

大橋 愼

岩倉公殿下

御衆中

二三 岩倉具視書翰〔中山忠能等宛〕 明治元年六月

臣具視の此行や成敗利鈍逆め期すへからす聊か天下の爲に鞠躬盡力斃て後に已まんとす而て居る者は歸るを俟たす諸賢各其任する所を盡し唯臣か曠職の後を善くせんことを冀望す 臣將さに此に一言せんとする所あり

岩倉具視關係文書第四 (明治元年六月)

三十七

今日公卿の務めたるや己れを行ふに恥あり賢を推し能に下り固なく我なく廣く善言公議を容れ遠く僻論邪説を排するときは必ず天下の士各其器材を籠にして來歸すへし若し又或は固陋の偏見を執り徒に位望を高くせは必ず天下の人心離畔し建武の覆轍を踐むに至らん是鄙諺に所謂釋迦に對し説法するものにして老婆の絮語たるに過ぎす固より諸賢の知る所なり抑中山正親町三條兩卿は先朝の股肱當朝の柱石たるを以て中山卿は宜く至尊を輔翼し以て聖器大成を圖るへし正親町三條卿は宜く輔相の任に膺り大政を贊襄し以て具視か闕漏する所を補ふへし徳大寺中御門兩卿は宜く中山正親町三條兩卿を左右に置き輿議公論を取捨し以て公明政務を執るへし四卿にして能く同寅協和加ふるに衆賢と審議し以て政令を施行せは天下の平治を望むなからんと欲すとも得へけんや臣屍を馬革に裹むも毫も遺憾あること無し且夫れ 皇國の新局面を以て之を大觀するに龍駕一たび江戸に幸し親く大政を視るは今日の最大急務にして治國平天下

の良計なり抑吾か國の繁華たるや關東に盛んにして其地勢は奥羽蝦夷廣漠の土壤に連接し加ふるに徳川幕府の大權を掌握すること二百有餘年の久きを経たり一旦之を處分するに府藩縣三治の例を以てし江戸に一府を置くのみに止まらば人心の服否如何そや必ず制馭し難きもの有らん故を以て龍駕東巡し江戸城を以て東京城と爲し東西一視敢て私する所なきことを開示せば則ち所謂殷末の頑民厥角を崩すも此一舉に在らん而て朝廷の基礎大に定まり皇化遐邇に被むらしむることを得へし是れ豈に書生の空論ならんや既に此時機を失ふこと一再ならず今日猝然之を舉行せば論者或は言はん天子を擁して東北を威壓すと故に姑く奥羽越の賊徒進勦の捷報至るを俟つへし此間必ず一髮を容れざるの時機あらん臣區々の微衷別に臨んで諄々説て已まさる所なり願くは諸賢意を此に留められんことを

六月

具

視拜

中山卿

正親町三條卿

德大寺卿

中御門卿

玉案下

二四 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年七月朔日

一翰冷拜啓候秋暑之候に御座候處閣下愈御安全珍重存候抑八千九殿此程無御滯御歸京昨日は御參朝御對面も被爲在且又御首飾御加之儀も以叡慮被仰出重疊愛度御儀奉存候閣下にも御畏り御安堵之御事と存候仍亦乍輕少右御申入之印までに肴八千九殿へ令進覽候御祝受候は、畏入存候仍亦如此に御坐候也恐惶謹言

七月朔日

慶永

右兵衛督殿

二五 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年七月五日

甚暑之節候處

皇上彌御機嫌能被爲成奉恐賀候二に尊兄依舊御壯勇御奉職爲朝野大幸欣喜之至に存候次に小弟不相變碌々消光無事に仕居候乍憚御放慮可被下候過日光德卿下向委細御模様親しく承り大慶に存候諸卿御盡力之程奉感佩想像仕候至尊にも殊之外御勉勵之御様子誠に難有感涙に不堪存候何卒御懈怠なく御進歩被遊候様奉祈萬禱候扱當地賊徒平定以來彌鎮靜徳川にも大に恭順し實意相立候様に見へ申候併油斷は不相成や何くに賊徒伏匿仕哉も難計所謂勝て兜之緒をしめる者今日と存候事不少御座候眞に天下平定に至

候迄は廟堂に於ても必御油斷なく御取締御座候様奉祈候
一廿四日御差出し 御沙汰書昨日相達奉拜見候誠臣實美存掛も無之過分
之大重任を蒙り戰慄恐懼實に手足所措を不知候其上大臣之宣下を蒙り
天恩重厚不堪感激候得共是以實に恐縮之外無之候不肖之身を以鑑察使
之命を蒙り候すら實に恐怖之義に候處況や八州之鎮將に於て不徒不材
之小弟何か其任に可堪や恐くは 朝廷之御明鑒を累はし奉らん事深く
恐入候是非々々此義は辭退仕候何承尊兄 小弟之心情御恕察給り辭表之
通御許容之程偏御周旋奉懇祈候乍併今日國家多難之際に當り 主上御
憂念被運候折柄臣子を死を以君に盡す之時猥りに謙遜仕候御義却る恐
入候義是非御請不仕候ては不相濟事に候は、八州鎮將之處は暫御請可
申上候得共 右大臣宣下之處は固辭仕候此義は達る御理申上候間宜御
周旋奉伏願候自然是非八州鎮將可仰付候義に候は、大總督宮御進退は
如何可被仰出哉若江戸平定の御成功を以御凱陣被仰出候御事なれば東

征としては下向慶喜伏罪開城上野賊徒は掃攘御成功之段深御感賞被遊
目出度御歸京被仰出候様奉願候乍併最早奥羽平定も三月を不出と存候
へは夫迄は大總督宮にも御滯陣被遊候方可然愚考仕候猶奉仰 朝裁候
自然御歸京御沙汰書相下り候義に候は、先小弟に賜り其上宮へ傳獻可
仕候間其分に御取計ひ奉願候

一京都江城百里除之懸隔情實氣脈十分に貫徹せず諸事齟齬仕候義も不少
誠以不堪心痛恐懼候既に先般諸道總督を廢し當分江戸鎮臺府を相設候
事後より顧念仕候へは誠に以恐懼に不堪其子細は右等重大之事件御委
任之命を蒙事とは申乍專斷を以 朝命を不伺候所置仕候次第 朝廷を
輕し候譯に相當り實に戰慄恐懼に不堪候間進退も相伺可申と存候何卒
可然御指圖奉懇願候猶又其後從 朝廷被仰出候江戸府之義に付ても既
に大總督鎮臺を置候上は直様廢し候事事情に於て甚難行有場合も有之
候間暫時其儘に相願候抔も 朝命を拒み候様に相成定る廟堂上御議論

も可有之と存候ては是亦恐懼に不堪候如此事情不相通處より東西之所
意齟齬仕候ては到底

朝廷之御失體を醸し候様に相成深恐入存候仰願くは事情不得止之次第
御照察之程泣血奉伏願上候

一賢孫二郎君之御義從 朝廷御内沙汰被爲在東山道總督其名は官軍にし
て其行は頗る暴戾也且猥に黃白を費し會計の道を不知國家之興廢をも
不顧との御不審有之候由右は如何之御事に候哉全離間之讒說無疑事
朝廷も右等之御明察可被爲有事と存候然に其讒說の起る所をも御糺し
無之猥に 御沙汰に相成候義實以御失體歎息無窮候右様之義傳布仕候
亦は三軍之向背にも拘り實に不容易事に存候此義に付るも彼是苦慮仕
候次第も有之何卒已來右様之義無之様可祈萬禱仕候

一先便以書狀申上候通當地政事之義當分假に寺社町民政の三職を分課し
徳川の規制に従ひ舊吏を用候事 王政一新政體確定の際甚以不宜機に

乘し急速に變革舊制を破り耳目を一新すべしと謗議仕候輩も有之候尤
之論に候得共可言不可行之事情有之候小弟之論は暫姑息法を以て一時
を治め徐に變更遂に政體規制に移し候方其功却る可速と存候所謂民を
治る如烹小鮮然に今專變革を主として舊來の法制禁令悉く不採用無法
に一新を爲んとせば政事無紀律職官人材不備百事紛亂民亦徳川之政治
を思ふに至らん歎小弟之愚論如此に候偏諸彦の御高論御示し願度候勿
論舊幕小吏輩狐狸之性今面目を改め勉勵從事すと雖決して油斷ならず
岐度監察を以て邪正是非を督責して使用するに非れば必らず舊轍を誤
て踏に至るべし實に可戒なり

一和宮の御使去る廿七日相勤申候委細橋本より言上可有申含候宜御披露
可給猶 叡慮之程御返答奉待候

一橋本義も御用有之候は、再下可被仰付御用無之候は、其儘京師に御差
留可然右否之處は本人の御沙汰可被下候

一三卿并高家領地段取相成候分如何可被仰付哉一應は御戻し被下追お御吟味之上兎も角御改替にても可然歟

一奥羽諸藩會に與し反覆官軍に抗し候向に追討之義來十日十一日海路より進軍之手筈に内決仕候

先は右之件々拜啓如此候任御懇意内情吐露仕候段偏御諒察可給候必御他見御無用奉願候差急相認不能盡心緒萬期後音候敬白

七月五日

實美

輔相公臺下

二伸時下折角爲國家御自愛專要奉存候大亂筆御察讀可被下候以上

二六 岩倉具視書翰

中山忠能等宛 明治元年七月十一日

愈御清康珍重存候抑越前中納言辭職之儀彼是議論も申述候處尙深國內之情實を承候得は實に不得止之次第却る被 聞食候方可然と存候乍去重職

之事獨決仕候儀は素々不相成候得共結局辭職被 聞食候儀ならは一日も早き方得失に於るは可然と存候仍る今日休日に候得共各位御異議無之候は、是を言上取計可致と存候尤巨細之情實は拜晤に非されは不可盡候間明日參朝之上萬々可申述候仍早々如此候也

七月十一日

具視

中山一位殿 不得止次第有之候義に候は無是非存候

正親町三條殿 承候不得止次第に候は、不能是非被聞食候段無別意候

徳大寺大納言殿 辭職之儀不得止次第に候は、被聞食別段存心無之候

中御門大納言殿 承候無據次第有之候上は尤無存意候

土佐中納言殿 被聞食存意無之候

宇和島宰相殿 無止次第に候は、被聞食存念無御座候

二七 松平慶永書翰「岩倉具視宛」 明治元年七月十二日

右兵衛督殿

慶 永

一 翰令拜啓候秋暑難堪候處先以
至尊益 御機嫌能被爲入奉恐悅候隨而閣下愈御清安御奉務珍重候扱は過
日より懇願之筋により一昨日雪江被召呼段々御尋問被成下御懇篤之御教
示被成下深重謹畏仕り奉感謝候右御禮申上度如斯に御座候恐惶謹言

七月十二日

別紙

一 慶永頃來所勞罷在平臥中別に致方も無之候故所藏之書冊一覽仕候處其
中條約十一國記至極簡易にして西洋不心得之者にも分りやすく候故乍
恐
上にも 天覽被爲遊候は、能々御分り被遊歟に心付候故一部取寄候間

閣下迄差出候間不苦候は、宜敷御取計奉願候

二 定る最早御承知と奉存候阿波中納言紀州艦乘戻候に付去る六日午刻國
許乗船之爲知御座候

三 上杉候越後口出馬之風聞有之候事尤不慥候

四 佛人竊に會津を助け候風聞有之候此邊委曲戸田大和守へ内々御尋可有
之候事

五 官武一途之御趣意に就るは以來は補略書法最初公卿是迄之通り相認め
其末へ諸侯官位年齢實名等被書載候て可然奉存候事

但府藩縣と有之候得は藩も亦 天吏に相成候故也

六 三四之條は小生より申上候儀は御内々にて戸田へ御尋被爲在候にも
閣下以思召風聞御聞込と申事にて御尋問奉願候事

七 徳川家來官位被停候儀は別段に御座候近來承候得は近衛家始諸大夫等
は諸大夫に候は、御所へ參勤仕舊主人に居り候得は辭官位候様之事

之由承り申候然る上は尾紀水三家加州等家老諸大夫被停官位候儀至當と奉存候

八中川修理大夫出兵一條に付軍資金五萬兩從軍務官被仰出候由承り申候右之趣意は慶永篤と不心得候故可否難申上候乍去以來は何卒諸家出兵被仰出軍資金取立被仰出等之大事件は於軍務官自由之權を廢し一々自軍務議定參與之評議に相成遂に自輔相御伺天裁之後行政官に施行候は、大に可然哉と奉存候
九愚衷之儘例之粗忽奉言上候也

七月十二日

慶永

輔相公閣下

二八 岩倉具視書翰副島種臣宛 明治元年七月十三日

尙々不相變御用繁に付不任心底乍失禮愚息代筆旨趣申入候實に御違約

に相成候次第於信義無申條苦心此事に候得共何分

聖上御東幸事件により爰に至り候儀萬不可止儀と御宥免偏に御頼申入候扱高松出兵云々替り出兵凡而坂木を御咄し申入候兵數は足下御取計之外千七百人都合候へは五千人にも近からんと存候右に奇に出て賊境に突入候は、必なるもの有んと存候足下偏に勤むへし天下之平定御胸算に有へし乍去高松杯に而實事を知り候は、萬一も賊内通無之哉と懸念なり御熟考之上には候得共時宜に而此事に御上睦候は、萬全は疑なかるへし德卿至而温順果決あり足下晨昏左右に座し急度御補佐之事千禱萬祈候萬事は坂木を御聞可給候也

別來悠々千秋之思を爲候時下秋熱未退益御多祥雀々躍々御下坂以后夫々御盡力之趣神戸より之尊書に因て熟知候其後も定而御成算之如く成功之事には可有之候得共重任獨決多少之御苦心不堪感謝候扱木戸大木兩三日
前歸京關東之形勢情實奏上於

聖上は尤能御聞込に相成深く 叡慮を被爲廻彼是御裁決既に今日東京之御沙汰相下候御巡狩は御算計次第不日に御發表實に聊も御懸念なく斷然たる御憤發爲朝野慶幸不過之候于茲一事極困之事相生し候は小生北征之事に候實は極密

聖上には及 奏上全許可を得候處今般之事件前途之處深く被思召候よりして北征には徳大寺を出し小子は必乘輿に隨從し犬馬之勞を盡候様懇々之

勅諭に候抑北征之事は閑叟公足下共に不同之處小子決死報國之微衷を以て強而諸君を動し却る今日に至り如此次第と相成候段實以反覆且欺罔之非りを可受進退維谷しかし何分日夜侍從之身

聖上御幼冲旁以前件之御切情臣子之情愛更に向所を失ひ只管聖意を奉而已仍前條徳大寺君北征臣は供奉奉命候其詳なる事は家來坂木下枝を差遣候間同人より御聞取可給候北地出兵之儀は吳々御配慮御盡力是

祈候依例公私繁忙草々閣筆

七月十三日

副島次郎殿

岩倉右兵衛督

二九 徳大寺實則書翰

〔岩倉具視宛〕 明治元年七月十四日

今度東北遊撃總督御内命を蒙り晝夜彼地之情態熟慮仕候處至重至大之任魯鈍柔懦實則實以不堪其任今度之一舉天下の治不治に關係仕不容易御儀と存候抑奥羽北越之出兵少しとせず而官兵不振遷延致候は全主將依非其任歟不肖實則世々文臣之家に生長し嘗て戎事を不識何ぞ叨に三軍將帥の大任可蒙哉實驚愕之至候宜心情御洞察被成下可然御賢考伏る冀處候也

七月十四日

輔相公閣下

實 則

三〇 伊達宗城書翰「岩倉具視宛」 明治元年七月十五日

拜啓一雨促新涼候處愈御勝常奉大賀候過日三條卿御問合之條御代毫
下案取調候處別紙之條々何分御決著無御坐候は揮筆難申尤十三國管轄
も東京に體裁被相改候は、亦相違は自ら可有之と考候得共來書に付るケ
條伺置度此他の事件は明後日參朝に可相伺候恐々頓首

中元 二字

宗 城

輔相公閣下

三一 松平慶永書翰「岩倉具視宛」 明治元年七月十六日

一翰令拜啓候昨夜之大雨催新涼候先以 主上益御機嫌能被爲入奉恐悅候
隨而閣下愈御安全奉拜賀候抑昨夜は御廻達被成下速に土佐黃門へ相廻し
申候愚衷相認候何分之御高案奉希候將又八千九君昨十五日御首飾御加愛
度奉存居候處手醫師より承候へは餘程御熱氣有之候趣御案申候何分御加

養專一に候今朝承候へは御瘡にも可相成かとの見込み之由慶永抔は數度
之瘡ゆへ不足畏候得共初るには御苦痛嘸々と奉存候何分御發日には燒
鹽にて湯漬計りかよろしく候臨發にては折々水を呑み候か宜候尤熱中也
且又去る五日越後口立早飛脚九日國許へ到着朔日二日三日越後口戰爭有
之餘程 官軍苦戦之趣尤從賊炮擊不用劔戟之戰之由 兵部卿宮未だ御着
無之四條西園兩君は柏崎を本陣に被定候よしに候兵部卿宮も御着候は、
同所なるへしとの事也且又横濱町人元弊藩にて出國許へ申越候由日頃横
分不風聞にては各國軍艦追々横濱集碇西洋人云日本人恐懼すへき事あ
るべしとの事なり西洋人誰れと申事も不分候不取留嘶に候得共任序申上
候横濱之義は早々宇和島宰相へ被命御内々探索有之候は、可然と心付申
候平臥之亂筆御海容可被下也勿々謹言

中元後一日

慶 永

對岳相公閣下

三二 岩倉具視書翰案「三條實美宛」

明治元年七月十八日

先達大原を以御問合之條御答左に陳述

一 駿河以東十三ヶ國云々は如紙別御布告有之候故御承知可有之事

一 駿河以東十三ヶ國中諸侯并に中下大夫上士等上京歸國共一々鎮將府へ可申出事

一 駿河以東十三ヶ國留守居江戸邸中へ可相詰事

一 寺社内願届等可申出候事

右御布告相成候

一 右十三ヶ國中諸侯并中太夫以下觸頭別に被相觸可然事

一 靜寛宮御始め天璋院女儀は轉移延引之儀不苦候事

一 田安一橋等領地當年は是迄之場所可賜城地坏不被下置候得共赴次第龜之助より可相伺事歟と存候

一 德川より朝臣并に御扶助相願候舊旗下之輩願之通朝臣被仰付俸祿は三百俵迄は舊祿之三分一賜り其以下は地方并藏米取とも其分相應に少減下賜候事

但本家内分け分地之處は如何賜候事

一 別條十三ヶ國政支配等に付るは諸侯中下大夫寺社等に至り家康以來受封之判物一旦總て其府へ取集早々太政官へ御差出可有之候事

但是迄既に差出候向も有之候事

一 管轄中寺社一切支配可被致尤官職之處は朝廷より御直々被 仰渡候事

一 京極備中守分地兩家は本家如願被 仰付可然候事

一 軍費金之處は會計より可相通候

一 二七飛脚云々尙議候末御處置可有之事

七月十八日

三條左大將殿

- 一 奥羽近狀報知書并日誌一冊令落手候
 - 一 駿州之小藩替地之儀房總之内に賜候旨令敬承候衆議に移封には不及との説も有之候猶御賢考之様存候也
 - 一 甲州城代之儀は猶衆議之上西諸侯之内一人可被差遣候事
 - 一 柳原辭表令落手候仰之通今暫時前任之儘之方却可然と存候此段從御府可被仰遣候事
 - 一 水藩へ之御達書是又令落手候
 - 一 宇都宮藩岡田眞吾御用有之歸府之儀令敬承候早々申付候事
 - 一 仁和寺宮始め復飾之儀に付御尋之條下札に朱書を以御答申入候事
- 右當七月六日出御狀御答
- 一 木戸大木歸京云々 言上に付愈東京之議御治定に相成別紙之通御布告に相成候猶御出輦之儀は御都合出來次第に可爲在之事

大總督宮
三條右大臣
關東在勤候

被仰渡書之通

- 一 濱松藩神戸木工建言入高覽候右確論之趣議政官一同同論に候間早々御勘考有之度存候也
- 一 薩州藩士鮫島誠藏森金之丞を建言之儀書付徳川氏へ被仰渡書并兩人建言書入貴覽候兩士は三年前は英米へ航海し能々彼の情實を得然も國體を重候者也若年には候得共格別之人物に候尤小松帶刀承知之人物に候也
- 一 具視并薩藩兩士下書壹通入貴覽候猶賢慮相伺度候事
- 一 江戸名所圖會令獻上御満足候事

三三 徳大寺實則書翰

〔岩倉具視宛〕 明治元年七月十九日

連日御精勵御奉職大賀候抑下拙不存寄被侵病痾御繁務中連々不參深恐懼至候逐々快方には候へ共何分發熱後腹力乏少元氣無之心外千萬に候今一

兩日之處加養仕度偏宜希存候兼御内意東北之事件下官籠居故彼是軍機御手後れに相成候様に而は爲國家其責逃るゝ處なく苦慮此事に候何分疾には勝難くかく時日遷延に相成深恐懼仕候宜御指麾奉仰候仍念々右言上迄如此候也

七月十九日

實 則

輔 相 公

三四 中山忠能書翰

岩倉具視宛 明治元年七月廿六日

彌御安全奉賀候仰

玉體彌以御快今日は御髪も被爲解御湯御顔も被爲在候處何等之御動も被爲在候まゝ御安心被上候様一寸申上置候且又別紙差出置候是は御考へ合せ迄に候唯今に相成彼是申立候義にては一切無之候得とも老婆心につくく〜と考へ候得はいかにも六かしき事共と存候通をむさと書付候事に候

御他言は御無用く希上候

尊兄御考合迄に御一見置希上候事に早々御火中希上候仍早々如此候也

七 廿六

忠 能

輔 相 公

一 聖體御幼少より秋冷寒氣の頃は兎角御申分被爲在候に付御旅行大に掛念仕候事

一 萬民々心未一決於列藩も眞の勤王は三四藩に不可過又御東行の國々も實に

皇威に服候所は稀にて多は敵地に付甚危く萬々一御道中にて御差支杯出來候ては實に以 皇威不被爲立候間掛念候事

一 御留主京地之所も餘程御手當無之候ては變を可生と掛念候事
右只今に相成彼是可申義は一切無之候得共先文三ヶ條心中に掛念仕候

或説に來三月頃にも候は、大に御都合御宜哉一には時節も宜く奥羽も平定候は、諸藩萬民も彌一定 皇威に可服に付御途中も安心且又會計の融通も宜く候得は自然民政も可行届と云

行幸に付建白

一御通を始め實に萬民悅服致し 皇威を被輝候様に無之候ては却る 御動座は不御宜と存候其取計方餘程六かしき義と存候
一御輕便の 行幸は萬民不難濫様との御憐愍又會計にも拘り候義にて尤御宜候但餘り御輕々敷 行幸被爲在候も如何可有之哉其子細は時勢辨別の人は右にて宜候得共天下人民十に七八は舊弊染傳の人ゆへ餘り御輕々敷候て信仰を不仕候様に成行可申哉と存候若 尊信を失候ては詔勅號令をも輕蔑致候様に相成候時は大成患を可生と甚掛念仕候右兩條厚々御覽考希上候

三五 大橋愼書翰「岩倉具視宛」 明治元年七月廿六日

誠懼恭白炎熱如焚候得共益御勇猛如虎御勉勵爲 皇朝奉雀賀候 懼碌々臥病後公務に區々たるに懶し惟祈る 殿下 廟論を輔相するの職掌を全し所謂天下之大勢を察し大本を立て大道を踏み大義を行はん事を竊に惟るに事々枝流區々に力を用ゆる事の繁く煩はしく却る大本を貫通せざる事多きか如し 朝政縱令ひ分課ありと雖 殿下之如く重任に被爲在候而分課を口實に被遊候而諸官之勤怠に御關係不被遊而は何之時か 朝政一致可仕哉宜く諸官御管轄益御勉強被爲遊度爲 皇朝奉渴望候事
一松平殿へ至急之御用被爲在候趣 愼東行着之後も被爲 仰遣候に付迅速に陪從歸 京候處歸着後既に五日にも相成候得共何之御沙汰も無之趣如何之事や實に確然たらぬ 朝議敷と奉憂憤候將又三河知縣事 愼東發之節將に議定せんとするに因り 愼歸途に引違ひ候位に被指下候事と心得候處未だ御議定中之趣不堪驚愕候事の運はさる何ぞ甚しきや

一三遠情實を平松卿演舌之處 殿下曰く左様なれば又貴公に行ってもらはねはならぬも知れずと何そ事之迂濶なる如斯也 慎等過日上京平卿へ書呈し且屢建言せしも何の事やらしれ申さぬが如し嗟呼々々朝議輕々可歎々々只々毎事確乎斷然被爲運度奉渴望候而已依舊不顧不敬言上仕候 恐惶敬白

勉夏念六

大橋 慎 三

殿 下呈

再白 慎參 殿奉伺御機嫌候筈之處病氣にて其義難整奉恐病氣之主意拙吟に表し汚 尊覽候也冀は暴怒する勿れ

三六 岩倉具視書翰副島種臣宛 明治元年七月廿七日

時下秋冷彌以御勇猛一入御苦慮御奉職之筈杳察候陳は此間御舊藩士并家來坂木下枝を以而申入候通兼而約定之前既に準備相整候處無余儀筋出來

終に不得果愚存實に千載之遺憾足下に對候鏡面皮之至申譯も無之次第に候乍然既往は不可追閣之小生代り人撰先般正親町三條徳大寺二卿間と申入置候處兩卿折柄伏枕故久我卿奉命發向相成候條未た青年之儀に付萬端御幹旋有之度所祈に候萬願小生同様に被存何も無御用捨御驅曳吳候願存候然る處木戸始め見込之所にては當政府參與無人且外國之事件重大足下ならでは不叶と議論に而足下歸京候様懇願に候處小子は此上何共難申入と申居候次第に候其内木戸より自然何とか可申越哉も難圖に付爲御心得申進候御進退素より御約定も候事貴意次第には候得共既に佐竹藩大に振起南部津輕同斷之旨に候間自然羽州着艦賊徒掃蕩之始末御見込相立參謀等に御委任可相濟候は、一日も早く御歸京本根御盡力之程千祈萬禱與羽北越等之近報一に美談のみ委細久我卿より御聞取可給候右は要用耳其内爲朝野御保愛專要之至候也草々頓首

追而坂木事御用濟早々歸京之様御傳聲願存候也

三七 玉松操建言書「岩倉具視宛」 明治元年七月

大學校御取立に付去二月以來 臣等 朝命を遵奉仕取調等荒増出來近々御開筵にも可相成手續之處豈圖や當度 臣等へ一應之御沙汰無之前學習院へ大學寮代之稱 御許容諸事御手輕に取計候様被 仰出最初之 御趣意追々變更至此頃候ては大學校大の字御取除大學寮代文武場に鼎立之御沙汰も被爲在候に付不容易次第同役共申談初發 叡旨に致齟齬候廉々申立候處薩藩岩下某不表立御用周旋方被 仰付候故同役より及示談候處御學校一義取極候役方其節東行不在合右歸上之後ならては耽と御決議にも難被及哉之趣申居候由に御座候右之次第にては最初急速と被 仰出候 大命にも違ひ且は遠近傳聞登京仕候者共之人氣も失し旁畏入候譯に御座候間御機務御多端には可被爲在候へども何と歎被廻 賢慮右御議定速に被行候様之御所置奉願候尙巨細御聞被遊度候は、平田大角矢野茂太郎兩人之

内被 召寄御尋問被下候様仕度候惶恐拜白

七月

玉松操

岩倉輔相様

御執事御中

追啓別紙一通同役方表向官へ持參仕候心得にて認候へ共先内々 閣下へ申上置候方可然旨申候に付奉備 尊覽候

三八 玉松操等建言書「岩倉執事宛」 明治元年七月

大學官名稱之儀 御許容に可相成旨先以難有次第には御座候へとも只官と申迄にて官之實なく諸官に不列天下之學政を管轄仕候事不成候ては搢紳家之武官諸大夫之守介も同物に御座候舊幕執政之砌は有名無實之官不尠候へ共復古御一新之折柄名實不相當之儀共追々御改正にも可相成之處新規御取立之學官には殊に以不都合に奉存候間名實相當仕候様何處迄も

懇願仕候

一大學官大學寮別々に被爲立候事條理不立と申者に御座候是非此は大學官中之漢字寮に無御座候ては難相稱最初被 仰出候御趣意は學校御出之後は學習院をも併せ儒者多少とも 皇道之大意は心得さすとの御事に伺候處分立仕候は彼は彼か意見を用ひ我指揮に隨ひ不申朋黨出來爭論紛起仕候事目前に御座候教誨より爭論盛に成り候て故障不絶御布告之御趣意には背戻可仕候是皆條理不立之所致に御座候へは再三被爲盡 朝議候様奉願上候

一御手當は是非五萬石相願度奉存候御疲弊に付御差間之旨可被仰下敷に候へ共其儀は臣等敢承伏不仕候實以御差間に被爲在候は、百事一體御減省可被遊之處御偏頗有之徳川氏名跡之如きは壹萬石にて被立候も過分に候處數十萬石を被下無功之上却る嫌疑有之旗本等數百人には舊領安堵其他無益不急之事件に被費候金穀鉅萬に候を 皇道之御基本天下

之風俗に關係仕候御學校は云々と申様にては誰一人承引仕間敷堂々たる 朝廷之御所置とも不奉存候

一御布告文中尊内卑外之字夷人等へ被對御差障に相成候由臣等之不解處に御座候此四字は春秋之眼目評判之宜語にて古今間然之者無御座候まして夷人へ之御布告にも無之御國人へ被 仰出候を傍より彼等之拜見仕候半に何之御子細可有御座哉御文中此語無之はと申には無御座候へとも是にて 朝官之方々御識見不立夷人へ阿諛被成候もよく知られ候る淺間敷御座候夷人等箇様之事共を漏聞候は、何程歎嘲笑可仕御國耻不過之奉存候間何卒御取除不被遊候様奉願上候

七月

玉 松 操

平 田 大 角

矢 野 茂 太 郎

三九 嘉彰親王御書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月五日

華墨拜讀候秋冷追日増加候處

至尊倍御安福奉賀候 貴公益御勇健珍重存候然は今般尊慮被配軍務官中
櫻井中根兩士下向被仰付追々御申含之旨趣逐一承諾徹膽感佩候已に於當
營も議論多端當惑日を送り罷在候砌へ重疊懇情之御教諭喜悅不斜候則尊
慮之通吉井前原之兩士交代本陣詰申附候段々礎基相立候間御安意可給候
猶委細之情實櫻井へ懇々申聞置候間御聞取可給候仍る早々過日御答如此
不備

八月五日

嘉 彰

代筆高免可給候

輔相公閣下

玉机下

四〇 松平慶永書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月六日

一輪令拜啓候冷雨鬱陶之候先以 閣下愈御清安珍重存候陳は下官所勞追
々快方に付昨五日より參

朝仕候間御安意希入候北野 御神事中に付

閣下御參不被爲在不得拜晤候間殘情不少候何れ明日は必 御參可被爲在
拜顔可仕と相樂申候扱又例之愚衷恐入候得共奉言上候是迄傳承候所に
は東京之人口幾十萬か難計候得共東京之米穀は半ば仙臺米多に而奥羽之
米穀多分に入津其半は諸國より運輸之趣に御座候然る處仙臺始奥羽多分
賊徒之事故 東京之人民米穀之運送乏少可有之哉と被存候是迄江戸之豊
年凶歳は奥羽の豊凶を以可知と申事も有之候義に御座候間何卒
東京被爲在候も此邊之

御仁政第一に被爲行奥羽之米を仰かずとも以 御仁惠米穀差支無之様相
成候は、東京人民之安堵不過之と奉存候又云 東京之諸産は米穀を始

渾る海運之便利を以繁盛いたし候事に候海運は御承知之通り浦賀港口實に要路に御座候

東幸被爲在候事故第一之御警浦賀口と奉存候萬一賊軍艦等浦賀口外入碇候は、東京之困難不過之と奉存候間至急に 梨堂右府公に被仰進浦賀口は 御軍艦等投錨不虞之

御備被爲在 御警衛にも相成第一海運截切り之事無之様致度候仙官位被召上候事に付考出し申候此上は 閣下之賢考を以御取捨奉願候也

八月六日

慶 永

輔相岩公閣下

二白昨夜も一昨夜も北方にあたり炮撃毎度聞え候方角は土邸にあたり申候尙御賢考可被爲候也

四一 岩倉具視書翰

「松平慶永宛」 明治元年八月六日

華翰謹誦扱御東幸に付關東米穀云々實に急務御同様苦心罷在候必三十萬石計運送致度ものと存居候尙旗下商人中々難澁之者不少速に御救助之道不相立候ては萬々不叶事候間頃日頻に心配候處四十萬金餘は出來候得共今三十萬計見留も付兼候閣下若御勘考筋も有之候は、右内いか計にても御周旋可給様伏て請願候尙又幕軍艦云々最第一之懸念是非御取切に不相成候ては萬々不相濟事と存候是も閣下深く御熟慮相成度精々人數を不損受取方無之哉極密御談申試度次第も有之折柄候間一方御盡力冀上候早々如此候也

八月六日

具 視

御 請

四二 伊達宗城書翰

「岩倉具視宛」 明治元年八月六日

雨後一層覺涼氣候先以愈御勝常奉賀候抑一昨四日慶邦云々に付進退相伺

岩倉具視關係文書第四(明治元年八月)

候處不及其義旨重々奉畏入候且亦當官辭表も差出候處被爲止誠以不肖之
宗城不堪恐悚奉存候將滯坂兵隊之義に付昨夕戸田大和守へ御教示之趣敬
承昨夜即刻急檄差立置候處今朝彼地詰重臣も乘艦は明七日に相成候由申
越候故不及出兵義は顯然と奉存候條不取敢拜謝旁此段及陳奏候云々敬白

八月初六

宗城

對明公閣下

四三 岩倉具視書翰

「嘉彰親王宛」 明治元年八月八日

爾來愈御泰安一際御苦慮可被成御指揮奉欣察候陳去月廿四日夜賊徒襲來
不容易御苦戦之由薩藩報知を以領承萬態察上乍然一勝一敗無常は全勝之
憂る處に非ず決し無間斷御驅曳是祈將亦昨日之新報過る廿七日官軍新
潟を取切新發田相應し候由至極宜き都合就るは甚恐縮之至に候得共愚存
申上候素々席上安座より掣肘候譯は決して無之只管老婆心与御推恕被下

度此策先達而羽州の後擊可然与存込候も越後口は彼之爭地金穀運輸之礎
加るに熟地其上如長岡は窮鼠食猫之勢可有之哉故に難を守り易を攻むる
北地之一策与存し羽州突擊之手賦に致し候然處羽州秋田之官軍氣鋒よろ
しく故に庄内西顧する能わす尙腹背之地新潟新發田へ突擊長岡一帯之賊
必す不戦して奔る之兆あり然るに強而長岡之前面を破らんとする即彼は
決死之賊なり我士卒を傷亡する居多ならん故に壘を固し暫時後擊之迫る
を待へし而不日久我始柏崎邊着之兵必新潟へ力を合するに如くはなし彼
前後敵を受けて不能支而して與るに一活路を以せは不戦して奔遁せん此れ
臣之鄙懷也素より諸賢無遺算儀に候得共聊千慮一策敢呈座右御熟考可給
候右要用耳時季御自重千萬祈望頓首敬白

二伸吉井楠田兩參謀へも別紙不差出候間御廻覽可給候

追啓

久我督府引卒之内因州五百人は兼而白川口救援之宿志有之候得共至急援

兵の報知に付一應差出候得共其外肥前等之兵も模様次第羽州へも御分配
吳々も頼入候不盡

四四 松平慶永書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月十三日

至急令拜啓候今日は

天前被爲 召種々

天賜

天盃

天酌謹畏之至奉存候扱退

朝仕候所ハ弊藩至急之飛脚到來一時驚愕仕候處大略別紙之通りに御座候
誠以不堪雀躍之至手の舞足の踏む所を不知欣然奉存候仍る昨夜中
閣下へ奉報告候實にく不日越後平定可及 皇運隆盛爲天下萬賀々々委
曲明日御届も可仕其餘國許々委細申越候儀は何れ早々寫取可差上候勝報

大意申上度仍如斯に御座候也

八月十三日第十字前

對岳公閣下

慶永

四五 小河一敏建言書「岩倉具視宛」 明治元年八月十三日

乍早晚不願不敬存付候儀左に言上仕候踰越之罪先以御宥恕に御一見奉
願上候

一學校は從來考居候次第も有之候處春來御内慮之趣奉承知雀躍之至りに
候得共其掛り之者行届兼且は大造に過候申立分も有之候哉何分被行兼
如何と奉存候内先頃上京之砌御内慮伺ひ愚存も申上置候處今以其邊に
相成居候由全く參與衆之内一兩人嚴拒之様子故歟と奉存無是非次第に
御座候都る餘りく御掛念に被爲過候哉に被奉察候右邊之處は何分に
も御英斷被爲在候様重々奉歎願候固より過日申上候通岩下參與へ御用

掛被仰付度奉存候夫は夫計には猶御不安心に候は、木戸參與と兩人被仰付候は是非至急に御英斷奉願上候御模様次第には中山様正三様之御内大學知官事御兼務被爲在候は、別御安心之御義に可被爲在歟と奉存候其知官事之御方漢學も洋學も兵學も御管轄被遊候は、御尤之御事と奉存候兎角御疎漏之事とも被爲在彼是申上候次第之品も有之候得共右等之儀はあまり入御念過候より御運ひ付不申扱々恐入申候か、る邊は御見通を以り早々御英斷之程奉促上候

一衣服之事是以其邊に御座候趣當節實に御多端東京行幸前別御用多とは奉存上候得共其實は中山様御取調之處蟻川圖書の如き功者之人へ今一應下調被仰付其上を御裁決被遊候は、僅半時一時之間に御片付可相成義と奉存候然を彼是御猶豫御座候は何分恐入候義に御座候畢竟先般衆議迄被爲問候と申義入御念過候を却る行はれ兼候一端と成申にて可有御座候乍併日誌にさへ摺出し有之六月廿五日迄一統之所存言上を其

後五十日を過御裁決無御座候は御不裁斷を天下に被示候次第何共苦々布奉存候間是非共行幸前急至に御決奉促候自然又々さしもつれ可申筋も御座候は、私儀乍不肖一旦御用向取調被仰付候者之儀に付何時も被召出被下候様奉願候其品に隨ひ行はれ易き筋を相考言上可仕候とも角も至急是非行幸前被仰出候様重疊奉歎願候

一總御朝廷材力之士をのみ被重候より御眼前之御間にはよく合申候て可有御座候得ともつまる處 朝廷之御爲如何と奉案勞候左候て又前件にも申上候通萬事入御念過義も多く又其中には先般醍醐様知府事被免候様に諺に申井中より火出候様之事も有之甚以苦々敷奉存候つゝまる處根元朝廷に御大丈夫之御ふまへ無御座故と重疊恐入奉存候且右に申上候材力之士と申も其實大英雄に無御座漸く外國と並立を志候徒に御座候其邊に付種々言上仕度次第不少候得共上京仕候てもいつも御事多にて條々言上仕兼心事彌もつれ候までにて無是非次第心外に奉存候

誠恐誠懼頓首謹言

八月十三日

一 敏

別に御内々申上候重疊恐入候申上事には候得共東京行幸にも相成候は、何分にも其以前龍顏拜之儀は乍恐奉至願候鄙情乍憚御推量奉願上候頓首謹言

輔相公 御親展

小河彌右衛門

上

^(別紙)別段内々申上候土肥謙藏事隠岐へ監察使に被遣候由是は適任にも可有御座候處終に彼地之知縣事とも可相成哉之風聞有之由承申候知縣事も適任には可有御座候得共僅一二萬石之御料所之知縣事は五等官にも可有之位之事同人を被召仕候は所謂割鶏牛刀歟とこそ奉存候併其實は御當地に於は方正に過候被容かね候故右之通候には無之哉萬一左様之儀候に於は人物御撰用之道に叶候とも難申可有御座方正之士をこそ釐

穀之下に被置度事と奉存候極て時世に活用せずなどの論も可有之歟只々活用之材士をのみ御用ひは乍恐後害如何可有御座候哉得と御勘考被爲在度奉存候

→結城筑後守事毎々申上候様覺申候爰にては相應之處に被召仕候様有御座度奉存候會計など随分可宜候同人事先年之子細も有之候併其儀は御齒牙にも被爲掛間敷候得共猶委細を申候得は其時之事は私義乍恐委細に、心得居申候右之者よりは更に其根元御座候其根軸をめぐらし候者は今日朝廷之御用を盛に勤居候様の事に御座候右位之事に付とも角筑後事御採用被下度奉存候尙山田右衛門へも申置候御承知被遊被下置候様奉願上候謹言

一 敏

四六 松平慶永書翰

岩倉具視宛

明治元年八月十四日

岩倉具視關係文書第四 (明治元年八月)

一翰令拜啓候秋冷之砌 閣下愈御安全奉抔賀候陳は北越捷報一寸申上候
尙彼地出兵先々差越候書狀恐入候得共差出候御留置不苦候仍申上候也

八月十四日

慶 永

對 岳 君 閣 下

尙々御用繁御回答奉辭候也

○越後に出張先々申越候寫

以內切紙得御意候去る廿四日晚々廿五日中之長岡口戰爭官軍薩州難戰退軍
に相成長岡城は素より水東は再ひ敵之有と相成形勢に森立之長州勢官軍
は先つ與板より川口南を相有ち互に防戰之勢に候處廿九日朝に至り妙見
之官軍長岡へ進擊に相成候森立進入之官軍も長州勢同敷折返し攻懸候故
關原口大鳥官軍も勢を得火急に川を渡し一時に攻撃敵勢此を先途と必死
防戰は致候由に候得共官軍多勢遂に手も無く長岡城を乗取り敵散亂官軍

逃るを逐ふて相進み福井大黒所々方々の火を懸短兵急に今町三條迄も攻
込候且又過日柏崎出帆之海軍奥越新發田松か崎へ上陸敵兵追つ拂ひ既に
十四五里餘方は官軍に屬し全く大勝利と相成追々新潟へ攻入候次第に候
依る元與板々海邊久田迄之敵勢落膽内顧加之海陸要路之官軍倍々破竹之
勢故難支義に付昨朔日曉より日の浦等々自燒致し諸口之敵勢引き色相顯
れ候に付官軍何れも此を機會と惣進擊に相成御人數に乙茂口は一番
に馬艸村の攻入り敵之臺場乗取柿木藤卷も同様相進笠脱は一番に武曾權
左衛門相進餘程烈敷砲戰敵之巢穴小島谷の乘入り候續林藤五郎見立山
之遊撃隊進入に相成候扱又與板川岸遊撃隊も薩藩と申合川を打渡り相進
み散兵伏し折を以小島谷邊々三條口之敵兵を烈敷打立敵方々も頻に打合
候得共遂に不叶四度路に成る落行候に付尙追行き中條と申處迄相進み同
所半隊殘し置半隊其先きの押出す又元與板本多門左衛門も同様進擊に
及候事に候愈今二日は進擊之手配に相進事に候拙者已三郎は昨朝敵之

模様相替り候由相聞候に付早馬に乘與板の懸付候處途中に已に乙茂御
人數敵之臺場に乘入候趣に付俄に馬を乗捨歩行に乙茂の出夫が小島谷
と武曾權左衛門手并に遊撃隊の出逢容子承り又々山傳に與板の參る事に
候尙此先き進撃に付るは如何之時機に相運ひ可申哉は難計候得共先今日
之景況大要如此に御坐候何卒此上雪前越後平定之御成功相立候様有之度
候餘は後便に相譲り倉卒中早々閣筆候以上

八月二日朝

一有賀清門組廿五日壹人深手に罷在申候只今是より又々地藏堂戰地へ
罷越事に候

○越後出張先々申越候寫

前略當境近日之形勢大略左に陳啓

一官軍兼心算之通り海軍千人松ヶ崎の上陸夫々新發田へ相應し奥州海

虫不明

道□川口迄進撃に及近傍十五里計賊軍逃遁既に平定に及ふ且又栃尾口
の長藩初四十小隊を率ひ山手を進撃長岡口は薩長初廿小隊を以て進撃
之手筈に相成廿五日曉七時兩道并ひ進之約束に候處長岡舊士敢死之者
貳百人計右刻限前八ッ時頃官軍無備之虚を突直に長岡城下の相迫り
火を四方に放ち打立候に付此時官軍實に無勢且不意に出候故西園寺殿
初關原迄退軍相成右火の手を見て長岡口諸隊分隊して急援に及甚激戰
然處殘る官軍持場にも賊軍相迫り苦戰に相成官軍死傷多し故に信濃川
を渡り川を隔て官軍固く守此時與板口出雲崎の賊壘の大小砲を以夥敷
攻撃いたし候故官軍應砲一層烈敷打合に相成廿四日夜半廿五日朝迄
之處砲聲夥敷次第申迄も無之候扱長岡陷沒賊勢益強暴競進之勢有之候
得共官軍栃尾口へ過分に配相成互に應援之道絶へ暫時甚心痛之次第別
不關原之方御手薄故與之輔方兵隊も四小隊柏崎着日直に此方へ出張相
成候事に候

一同月廿九日妙見山之官軍進擊再度長岡城を攻落し此決策は廿六日於關原吉井幸輔の面會之節同人内
 之話有翌日見附邊迄追擊に及右に付昨朔日與板出雲崎諸口も惣進擊と相
 成依之有賀清門高村藤兵衛隊乙茂之砲臺を乗取武會權左衛門枋屋□虫之
 助隊日野之賊を追擊し賊之根據小島谷へ進み此處に六番遊擊隊并林
 藤五郎之隊と皆一集す乙茂藤卷之兩隊も亦小島谷へ相集り同夜島崎迄相進む川岸之遊擊隊は薩長と牒
 し合川を渡し與板敗走の賊軍を散兵川中に出張り狙撃に及ふ此隊は昨
 夜中條に宿陣す本多左衛門手は昨夜田尻迄追擊御手勢別々勇進且又死
 傷壹人も無之扱官軍兩日之間大勝利と相成實に愉快之次第に候賊勢も
 新潟を被絶且長岡落城新發田官軍に應し彼是に付狼狽の體に候得は今
 後之所官軍之全勝無疑事に候故愈以輕舉遠算無之様肝要と存居候尙各
 局も可申越大略のみ申述候已上

八月二日

再陳時下御厭可被成候拙者共所々奔走無寧日相暮候昨夕は孫四郎方

已三郎義今朝進軍之手筈相成候に付與板迄乗付候積出懸候處乙茂柿
 の木邊早や進軍之旨聞付候に付馬乗放し直に賊塞日野小島谷等實檢
 致し昨夜與板へ及出張申候五一郎儀はひばり邊迄出張之筈爾後未だ
 便り無之候事

別

唯今承候得は御人數先鋒地藏堂へ繰込分取も有之と申事に候併報知
 は無之故其段御承知可被下候

○越後出張先々申越候寫

前略昨日飛脚出立之筈に與板表指立候處一昨來一同進擊相成に付御用
 狀指出方届兼可申歟と出雲崎驛に於今晚立出立差留之由其表に於も頻に
 飛脚御待兼致推察候扱昨日來愈進軍相成に付與板出張之向々不殘今朝地
 藏堂驛へ出張に及候出雲崎之向にも小荷駄方之外は今日同斷當驛に繰込

候興之輔方は明日此驛へ出張被致候筈に候扱又賊軍大敗三條迄逃行候處官軍續る進撃相成候故此所も逃散加茂之方へ落行候右に付明日は何れ攻撃可相成候得共迎も一支も出来兼可申被存候新潟之官軍と與板出雲崎之官軍と最早相連接之運ひに相成どふか村松藩も降伏狀差出候哉に極内傳承致候會人も三條を退候時は餘り之瓦解故落涙して罷越候由に候此段昨日之内狀に附呈致候以上

八月三日

二白五市郎儀彌彦之方へ出張堀十兵衛有賀清門兩隊并六番遊撃隊等と進軍之由に候以上

○官軍相進候處所在の父老欣然相迎實以簞食壺漿之情狀眼前に候以上

四七 嘉彰親王御書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月十七日

聖上倍御機嫌克被爲在恐悅此事に御座候貴公彌御勇健御勤務珍重之至り

に存候陳は近來有志之輩天下形勢云々御達之儀に付當時軍監申付有之候人々始め軍曹且御親兵等の處置如何之御見込に候哉當時大に盡力有之於此時忽歸藩申付候は實に無此上差支と相成軍曹等より此上人數も増長仕度心得に候仍而命但馬何歟と令言上候軍曹親兵等之儀に於は是非々今一應御勘考之程奉希望候也恐々謹言

八月十七日於三條本陣相認軍事多忙中亂書高免可給候

追申冷氣増長之折柄實に爲天下御保愛專一存候昇太郎を以而申入候會計一條忽御盡力給り實に畏入候

聖上不遠東京へ行幸被爲在候趣萬々奉恐悅候就るは誠に御繁多之御事と奉恐察候也

嘉 彰

輔 相 大 君

四八 大原重德書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月十八日

過刻拜承仕候砌土州之說一應尤に相聞へ候故其儘退去候得共能々熟考仕候得は全只其道理計之儀にて眞實 玉體を不思議之談論に候私共已下少し身持候者遠旅仕候得は病付候者も往々有之候増て風霜に御馴不被遊御身を寒天に向ひ百三十里之行程氣候并水味の變り邊杯を御案し不申上ては不相叶事に候勿論關東之人心を得給ふと不得給とは雲泥之事故得給ふ程の良事は無之候得共其良事を行なはんとして其元に障り候儀御座候は、如何可致哉尤風土水味等之障りも不被爲在候は、無此上御良策に候得共萬々ケ一にも被爲障候節は如何必其儀無之と請合候事も不相成と密細に御案し申上候は則親子之情實自然之節は取かへしのならぬ御事と此邊を深奉存上候得は實以不容易御儀に候勿論人心を得と失ふは此節至極之御大事勿論候得共其元に障り候儀有之候歟と掛念仕候事有之に於ては換らるべき儀には一切無之候何卒此道理を以一事言上之筋御勘考被爲在

候様奉懇禱候且又御咄しの六萬人又十萬人等之事は只鳳輦を拜かまさられ候や又は玉體を拜かまさられ候とて一時は難有と拜も可致候得とも何にもせよ米金を被下今日之暮し方の立行候様不成被遣候ては 御徳化とも申上らるゝ事にては無之候餘りの過言恐入候其米金は御藏蓄を分たれ候にては無之彼に探て是を賑し給ふ様の事にては實に詮なき御儀と奉存候其上賊地近く候故此難をも御案し申上候何卒しなよく御延引之程奉祈候に付更に以書面内々言上仕候宜奉願候也

八月十八日

重 德

岩 倉 輔 相 卿

四九(參考)大原重德書翰

明治元年八月十三日

○編者云本書宛名を記さすと雖も前書と頗る相關せり今姑く茲に収む

今般東京へ不遠内 行幸可被爲有御儀敬承仕甚以恐縮心痛仕候右は深窓に御生長被遊候玉體を平人同様百三十里も御旅行被遊候御儀は風土之遠

且水之替りめ等は如何御防可被遊候哉平人と雖水當り等の事有之候故に當春日々御膳水運送仕候て何等之御當りも不被爲在恐悅至極奉畏候儀に有之候乍去供奉之輩下々には腹瀉仕候者も有之候由至極御案し申上候事に有之候處十三里程之事故風土も格別之事も無之歟殊に時節も好敷何之被爲障候御儀も不被爲在 還幸被爲在人毎に恐悅無此上安心仕候事に候此度之御儀は百三十里之事に候へは逆も水運送抔逆も及候儀に無之殊に風土氣候も相變り其上寒空に向ひ平人と雖可成は春にと差延し候は人之常情に候處尤 御慰と申にては不被爲在實に不被爲得止御儀には可被爲在候へとも 行幸とは實に勿體なく存知寄らぬ御事恐歎仕御延引奉懇願候事に有之候ケ様に申上候へは只々老衰之儘老婆心因循いたし姑息し愛に感溺いたし候様に可被 思召候得共人之體と申物は議論道理に隨ひ候事は何時にても相隨ひ改られ候得共生育の振合に寄其工合は速に今日ケ様と替られ候事には決る無之候甚敷申事には候へとも譬て申せは四條五

條橋上下に平臥仕候者足に霜を結び候得共安眠仕當る事も無之渡世仕居候誠に申せは議定參與辨事之方に俄に屋根なき大道に令臥候は、一夜にて忽風邪に被侵候事言を不待可知事に候ケ様之次第を能々思慮仕候得は風と氣候且水に抔被爲當候は、如何可有之哉是は求てケ様之場所奉爲向にては無之哉甚以恐懼之至りに奉存候是は 玉體を深御案し申上候て之事に候扱又 行幸之御趣意と申せは兵馬之間人心兢々治不治之間向ふ處を不辨と申邊かして關東は別る舊幕あるを知て 至尊を不存輩故一度幸行被爲在其難有さを爲知度被 思召候趣意之由至極左も可被爲在候へとも東京之地は差向無事之趣には候へとも何故に靜まり居候哉も不相分深思慮仕候得は沈靜にして時を待ち候も不可又三四十里外に如何様之謀略潜伏人有之も不知候畢竟彼地は敵地に候はず哉其敵地の踏込候は征伐大將之役前にて既に總督宮下向にて先鎮靜之姿に候へとも前文通虛實未難辨猶又奥羽には賊徒相集り官軍に抗し居候是全く舊幕之恩を不忘候故

に候はず哉其戦争之地不遠所へ被爲成徳化を被爲布候とは大に御見込違に候はず哉不敬之辭に候得共在體言上仕候所謂吳起の不孝人も戰場には屹度被用曾參之孝行人も戰場には詮なく候類にて如何にも御危き御事に候はず哉全く

天子の尊き事難有事を相辨へ尊崇仕候心得之者共に候は、何そ只今於北地官軍へ向ひ炮發可致哉至尊之尊とさも相辨へねはこそ官軍に向ひ發炮仕候事と存られ候然れば東京へ行幸被爲在候は、彼賊徒幸の事と東京に押寄候も不可知候勿論御警衛官軍之御備は勿論候へとも勝敗は時の運に候得は如何とも難定候然ればケ様なる危き地は行幸被遊候御儀は實以存も寄す恐懼之限りに候所謂君子は危きに近よらずと申候況至尊之御身に於てをや鳳輦を被回候地にては決る被爲在間敷偏に御延引至祈至禱仕候若又賊徒不寄來候とも前に述候通り何れに何の工み有之も不可知疑ふは不宜事には候得共此節疑を不成ては却る大敗を取候事も可有之

可恐事に付既に於京地も先達々往々會人の潜伏と聞へ候へは忽捕亡の人数を催し嚴重に御手當も被命候御次第は全會事を成さん歟との御思慮に出て巨難なからしめんとの御事に候はずや假令一人にても潜伏いたし大事に及候てはと御思慮の程は至極御至當の御事に忽狩盡し候事に候其に引替治歟不治も難定地は行幸被遊候ては百三十里中何れに何を謀り居候も不可知尤其故に御先回り見分等萬端行届かせられ候は申迄も無之候得共俗諺に守りてに隙は有れとも盗人に隙はないと歟申候間自然大變事有之候上は如何ん共取返しのならぬ御事に候はずや但多人數ならねば大變事はできぬ事には限り不申一心決定さへ御座候得は一人にても出來候大變事も有事に候間千思萬慮を被回何卒行幸一先御延引に相成候様懇願仕候前段申上候通り會人の潜伏する者さへ御懸念被遊候と彼地は行幸とは實に天地雲泥之相違に被爲在如何之御事件に被爲在候哉不審千萬之御事實に御危き御事に候はず哉只々御延引願上候事に有之候毎々愚

存言上候實に恐縮仕候へとも不堪憂苦言上仕候味死百拜謹言

八月十三日

重 德

五〇 松平慶永書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月十八日

一翰奉拜啓候甚暑之砌に候處先以 皇上益御機嫌能被爲入奉恐悅候隨而
閣下愈御安泰不相替御盛務奉欣賀候抑慶永十六日曉暴痢兩三行其後發胃
瘞餘程難儀仕候處昨日より追々順快に相成少々つゝは熱氣有之候得共最
早一兩日にては多分參朝可仕奉存候間御放念被下度候扱暑中此一兩日は
朝夕別々爽涼雖日中凌能方に御座候如此時候には風邪下痢等往々有之別
亦此兩三日參 朝不仕候故か頻に 玉體御案し申上候何分御障り不被爲
在様致度御内々 閣下迄御様子相伺申し乍恐 御 格子後此涼氣中は御
夜食等御重ね被遊 御風邪御下痢等御感し不被遊候様乍婆情 君側之者
御手當申上候様仕度候是等甚以愚昧之申上方に候へとも婆心御案し申上

候餘任御懇厚 閣下迄奉言上候兩三日不得拜晤候に付愚衷且御見舞申上
度如此に御座候書外期不日之面晤候恐惶謹言

晚 夏

十八日夕第一時

慶 永

輔相岩倉公閣下

尙々時候不順別々御自愛被爲在候様奉懇祈是も亦爲朝野に候扱は先般
被仰出候越後出兵之義當月十一日香川入夕刻差立候家來二人十三日夜
着然る處過日雪江を奉言上候通り越前守海浴罷越居候城下の五里に付其
趣申遣十五日福井へ着可仕之由申越候家老始其後出立十五日頃着可仕
歎何分追々先鋒出張之手筈に相成候趣申遣候其後之便りは以日積考候
へは一兩日中には國便可有之と存候越前守も手足餘程痲痺起居六ヶ敷
由乍去此度は 朝命之事ゆへ是非く 出馬之覺悟にて當時専ら療養中
に御座候何分にも段々都合宜趣に御座候間御安慮奉希候御承知之通り

主小拙せつかち故日々飛脚差遣し候事に御座候彈藥之義も乍殘念軍務官の遅々去る十五日頃御達相成候ゆへ早々申遣候得共日積り考候へは兩三日には御請可申來と奉存候色々右等に苦心仕候得共段々小生存慮貫徹可相成様に被存申候尙追々申越候は、又々可申上候也
○此新雲丹乍輕少國許を差越候故御晚酌御相手に奉呈上候御笑味候は、畏入候也

五一 大原重德書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月十八日

岩倉輔相卿

重德

今朝は御面働恐入候早速御面會畏存候扱御咄し之一條例之遲鈍に一應御尤之筋と相心得退出候得共一寸發言候に道理計は左様く、やがと申候筋いかにも残念に存候間今一應御面働を申上候推參と存候得とも却る如何と以使差出し候且又天章和尚參候故其咄しに及候處至極殘念かり候敷

存意可相認獻言可被爲申聞候得は不堪默止一筆相認乍匆卒入御覽候實以行幸御不利は多候得とも御爲方は一向不被爲有旨追々申述居至極尤に候徳化を布に被爲成と申事は一向被爲有間敷御儀談し居候猶萬々拜面可申上候早々不興

八月十八日

五二 中山忠能書翰「岩倉具視宛」 明治元年八月廿日

○和宮御上京之事橋本類に催促是も尤に候三條卿上京止め相成候上は此間申入候通たつて御上京被 仰遣候は如何哉御賢考希入候御輔卿御遣候哉議定方申遣哉

○御東行小兒髪ゆい仕舞仕手もなし依之髪引結り童を術なし仍水干申付候

○御東幸供奉依例直垂のよし彌左様候哉爲念伺候違候は、坊城へ得と御

命希入候

○今日參 内武家自辨事被伺候様申答候國造も同斷

○廿一日 伊勢 廿二日 山陵 奉幣發遣

廿三日 兼み御有卦御内祝のよし

廿四日 長州參 内御馬場開き

廿五日 御即位内見

廿六日 上御内見

廿七日 御當日

廿八日 參賀御祝酒被下惣ら

廿九日 御延引山陵 行幸

雨なれば卅日

右の通の御日次なく宜希入候

一下かも二人參 内御對面を頻に願候是は先日兼て申上伺定之通 一

社に上首一人の不相成と御社により其家より申立候ては中々六かしく候被定候方萬世の御定御宜
と存候爲念申入候

一今日鍋息へ御沙汰案言も申出置度候

一同人今日御對面被下之事は御命之通取計申候

右早々申入候宜希入候也

八 廿

一御東行堂上小兒各包輿の事に候哉御内儀の尋に候間伺候

右此文中へ御加墨御答希入候也

輔 相 公

忠 能

五三 岩倉具視書翰〔清水谷公考宛〕 明治元年八月廿一日

五月三十日御仕立貴翰八月上旬到着則拜誦候爾來多事不得呈一書曠禮之
罪多々謝々益御勇壯御勉勵爲天下幸福不過之候隨而微生に於るも乍不肖

頃夜勉勤御推察可被下候陳々其地元奉行々之御請取方諸事御都合罷御運
びに相成裁判所等も府今は箱館速に候か御取建に相成追々御所置相附候義益々
御努力に依り候事と遙に感銘之至りに奉存候且井上石見義御差登に相成
候處同人儀は横濱表々上陸江戸地に於る諸事示談相濟直に引返し候趣に
付上京は無之候得とも追々傳承候所實に御憂慮之件々不少不容易御心痛
之程奉恐察候尙此上一際御奮發爲邦家御盡力夜白祈所に候右要略拜呈書
外期后鴻候也草々敬白

八月廿一日

具 視

岩倉具視 清水谷 殿

御方

御用繁愚孫代筆高免本文申入候通數百數里隔絶之地萬事實に令遠察
候越後羽州奥州凡る追々官軍御勝利最早不日一定之旨御互に恐悅に
奉存候早々以上

五四 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年八月廿一日

一翰令拜呈候愈御清安珍重奉存候陳々昨日退朝直に國鴻有之右は北越勝
利之報知に御坐候別紙概略入尊覽候御留置にて宜候夜陰相成候故今朝致
謹啓候也頓首

八月廿一日

慶 永

輔相公閣下

五五 秋月種樹書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年八月廿二日

三道官軍西洋醫の事一昨日御布告に相成り候御布告面御廻申上候
先刻伺置候參與一同直垂被下の事冠衣の御間違には無之か今一應相伺候
正三御口氣にては衣冠の御間違かと被申候
右々條建言仕候也

八月廿二日

今日

閣下御出仕有無相伺候是非御出仕有之度正三卿被申候

輔相公

種樹

五六 岩倉具視書翰〔參與宛〕 明治元年八月廿五日

御東幸之事既に廟議相決候上は一日も早く御進輦被爲在候方可然奉存候に付今又改る御談申入候

一 二十七日

御即位被爲濟翌二十八日直に御東幸可爲來月上旬旨被 仰出度

一 御即位御大禮被爲濟候に付るは従前大赦被行候御例も有之殊に當春

御元服後も被 仰出候義に付此度最同斷と存候尙御心附之義有之候は

一 承度候先公卿之内に於は當時高松孫之外幽閉之人も無之かと存候得

共是又御熟考所希也

但し一ヶ年兩度之大赦故如何之者や元來大赦之義於御大政其利害得

失如何可有之と兼て存居候間篤と御賢考有之度候

一 御即位は格別御大禮之御事故前以諸藩貢士に布告致候は勿論御當日何

々御沙汰有之候は如何

一 御即位に付改元之義勿論御先例通と存候得共御大禮後速に被改候か又

は當年中にて可然か

但 御一代御一号之義に被決候ては如何深御賢考願入候

一 昨日廻覽候三條書翰之通り同卿登京無之に決し候上は乍不調法供奉可

仕哉と存候尙賢考拜承致度存候

一 當職供奉之輩議定に於は中山卿山内侯宇和島侯參與に於は木戸大木辨

事に於は坊城千種秋月田中等愈可被 仰付候哉篤と賢考承度候

一 德大寺卿には三條登京無之上は御留主之御專任願候

- 一五辻戸田兩朝臣は爲御道筋點檢二十八名登程被 仰付候事
- 一田中供奉にては諸侯旗下取扱方神山一人相成候に付何角萬端御不都合
- 一之旨辨事中申立も有之且當人大坂之節も供奉仕此度も亦同斷候は神
- 山へ對候も如何と當人心配有之候へとも既に前條御治定之事に候間
- 一旁田中は供奉被 仰付可然歟
- 一但し諸侯始進退取扱方之義實に方今之重大事に付神山一人にても迷
- 惑可有之依之福山藩齋藤素軒兼有有名之者に付同人の權辨事諸侯掛
- り被 仰付候ては如何
- 一容堂事當職に奉 供奉
- 一但し御先着被 仰付候心得に候
- 一前驅山内兵助大洲加藤兩人被命大洲義は御東幸之義拜承直に上京是非
- 供奉申上度存念之趣實に感服是非如願被 仰付度候
- 一後驅備前因州兩人に被命度候因州事從來所勞之處御内命之儘推る上京

- 一之次第實に感佩是非供奉可仕筈に候得とも旅中か餘程病氣再發之趣如
- 何可相成哉も難計候若愈所勞に奉 供奉難致候は、分家之内可然者被
- 仰付候事如何尙御賢考承度候
- 一御留主中萬機總裁之任正親町三條卿被 仰付可然歟と存候
- 一御留守に衛之儀は長門宰相肥前少將島津修理大夫始夫々被 仰付可然
- 歟右者七口諸關門南北海御豫備始の夫れ々々軍務官にて取調被仰付有
- 之候これも二十八日被 仰下候心得に候
- 一今度外國官副知事小松被 仰付候得は肥前と兩人に相成候左候得は
- 他官も同斷に付軍務官副知事長岡有之候得共久留米も同職に被 仰付
- 度は亦御相談申入候
- 一軍務官取締之儀兼る參與にて大木福岡兩人被 仰付置候處昨日愈被
- 命候に付至急に規則相立候様有之度殊於大木御東幸供奉も有之一
- 入連に御用濟相成候様致度存候に付從今日ひたと軍務官の出仕被 仰

付候否は如何

但御親兵徵兵稱号如何に付以來親兵之名を被止候は、右は藩々各有名之士より差出候趣最大切と相心得候か之義に有之候得とも今日之兵制にては却る無益に屬候か但勇壯之者に候得は事足り可申被存候尙又一昨日も府縣兵制之儀に付被 仰出候趣も有之候通此兵制も速に被建度候此外御規則之儀數多可有之哉に候間御心附之儀は福岡大木の御相談御示教願入候

一三岡上京御 東幸に付前以東下之儀被命候處大坂鑄金其外會計基礎漸半は相立候處に而只今東下仕候得は是迄之儀盡く水泡と可相成旨段々申建尤に存候間矢張被 仰付置候通池邊に被命可然か然る處參與之内一人早く東下之義三條大久保等々度々催促即至急に三岡可差下候様答置候處前條之次第に付甚不都合に存候右は如何致し可然か御相談申候一副島之儀は羽州發向御用半にて歸京之儀に付更に被差下度候是又御賢

考承度候

八月二十五日

參與御中

具視

五七 岩倉具視書翰嘉彰親王等宛 明治元年八月廿九日

秋冷之候聖上倍御機嫌克被爲涉殊に一昨廿七日御即位御大禮御首尾克被爲濟恐悅至極奉賀候殿下彌以御多祥被爲成御鷹揚奉遙祝候陳者北越御部下連日御勝利遂に村上陥落一圓平定に可立至爲朝野幸甚此事に御座候抑過る四月より出張候薩長始兵隊連月之苦戰山野險難之驅逐軍裝縵縷肩脛露暴之有様承之實に席上安臥之想像する所に非ず實況如何可有之哉可憐之極不堪歎息依之今般御手元沙汰を以て軍裝千人分新規相調差送候間最初より出張之兵丈け御主意篤と被仰付御配當相成候様御沙汰に候雖然現地之形容百里外より不分明候に付自然右等之御恩慮よりして偏頗に涉り

三軍之不和を生し候おま一大事に付篤と御勘考參謀等へ御説之上御取計奉願候當地よりの見込にては四月來出兵之分は格別之御沙汰有之候可然と存居右之通取計申候彼是御斟酌奉冀候右は要概艸々如斯候也

八月二十九日

具 視

會津征伐大總督宮殿下

越後口總督宮殿下

五八 三條實美書翰

岩倉具視宛 明治元年八月

去月末家來差立尊慮奉伺候處去九日御答書御渡即昨深更歸府尊書拜讀并御沙汰書奉謹奉候僕憂念苦心之餘密に建言候處微忠之程御照察實不堪感銘候然るに近日當府之民情流言浮説も不少聊動搖之體に相見候旁鎮將之職掌に取り相はずし難き場合も有之大久保は唯今上京決る不宜頗不同意之趣申居候誠以今日之處僕進退維谷身不知所措候先日御書中之趣にては

尊兄御供奉之様に拜承候間聊安心仕居候義に御坐候處今般 御沙汰之趣にては尊君御供奉も難被成哉と奉察候何分遠方隔地情實不通消息音信前後行違勝にて不都合之段恐入候得共朝變暮移之形勢今日之策明日不可行齟齬之事のみ心痛不惡御洞察今一應御指揮奉願候何れ尊兄 僕兩人之中一人は供奉相成候様敢る他人に可語義には無之候得共彼是奉懸念候義も不少候得与御熟察奉仰候

岩 輔 相 公

實 美

極々密呈

五九 曾某建言書

岩倉具視宛 明治元年八月

蕭啓只今原家へ參 殿仕候處幸御歸館に相成拜承仕候には此度 御行幸被爲遊候に付輿議紛起就中或一説に方今 御適中之御時節哉共有之候由此儀一應勘考仕候得去至極尤に相聞へ申候

乍去篤と熟思仕候得は何とも恐入不安に奉存候素より
御徳化を被爲布候御事々輩下は不申及畿内七道何れも
皇宮に御鎮座被爲在候あこそ當然之御儀と奉存候左候得は當節東西混雜
之時節にも有之殊更

御巡狩は御不都合之御儀とも奉存候其迎も追々

御靜謐に相成候上は自然と海内之人民 仰膽仕候は不申及

皇威は遠く海外へも洋溢可仕と奉存候何分乍恐未だ

御即位も不被爲 濟折柄強あ

御動座

御遠幸被爲遊候あは輩下は元より海内之人心疑訝に不堪是邊も戸曉家論
し候儀にも参り兼可申哉

朝威も自然と輕忽に相成行次第哉共恐入奉存候此儀を押あ

御主張被爲遊候は、所謂北峨之構担瑞像之出行と 御同様之御儀にも相

當り不申哉と誠に恐懼悲歎に不堪奉存候

原家にも深く御歎息に付 不慧にも右之段不憚言上可仕と御示しに付不

願

御機嫌乍恐踰越言上仕候多罪

御海容被成下篤と

御熟慮之程偏に奉庶幾候恐惶頓首

戊辰八月

僧某蕭啓

六〇 岩倉具視書翰「諸侯掛宛」 明治元年九月三日

具 視

諸侯掛御中

代筆高免

拜承候東京より到來之書類脱艦一件四通門脇書狀貳通十三州へ御布告元

箴下差等餘勤割等四通外に壹通都合拾壹通一見後差返候間御布告等同様可然と存候書類中議政官廻り之部は御覽後彼官へ返却可給候
一松前敦千代儀は艦脱走彼是に付愚存も有之乍迷惑今暫被差留候方可然と存候

請高案

一酒井直之助家來問出之儀は尊慮通御執計に可然存候
右草々御答如此候也

九月三日

六一 松平慶永書翰

〔岩倉具視宛〕 明治元年九月四日

一翰令拜啓候冷氣増加之處先以
皇上益

御機嫌能被爲入奉恐悅候隨

閣下愈御安泰奉拜賀候然去る廿四日發越後口出張家來一筆用事申越候尤詳悉之報知には無之候得共彼地先其後大變動も無之由賊追々引退き官軍隨而進襲之様子石間踰關賊自燒引拂候趣に御座候右は北越之便り晦日着にて弊邑を昨夜申越候格別申上候程之事にも無之候得共分り候丈け及拜啓候頓首拜

九月四日

尙々小松も昨日無異儀難有御請申上安心仕候已上

輔相岩公閣下

慶 永

六二 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治元年九月六日

別冊到着仕候間入御内覽申候

秋冷漸催候處

主上益御機嫌能被爲渡奉恭悅候諸君各位御清適御奉職御勵勤奉扨躍候然

は當府に於るも先以靜穩幸に御省念奉仰候旗下脱走之輩も彼是有之種々浮言流説も不少候得共格別之義も無之趣に御坐候脱艦一條も如何相成候哉區々之説にて確報無之候現に三艘は破損仕候由實に天幸に御坐候就るは之を制する之良器を得度ものと存し鋼鐵船或堅牢之軍艦買入之手段も百方周旋爲致候得共何分惣不相調切齒痛心此事に御坐候奥羽之形勢も定る督府より報知有之追々進討已に賊巢に迫り屠滅之一段に及候よし全天威皇運に依て元惡巨賊伏誅に至候事國家恢復之秋と奉賀候乍去官軍之艱苦勤勞人民之塗炭實に聞にも不忍義に御坐候此處は深く

聖念を被爲注候様奉願候扱御東行之義も當府旗下始末窮民扶助之目算相立候は、御出籠も可被遊趣委曲北島香川より承候旗下所置之儀は徳川領知七十萬石を全く下賜り候は、可成扶育之道も可相立必竟は活計に盡果候より暴動を企候徒に御坐候得は其道さへ有之候得は徳川家に責を歸し

屹度鎮撫之策も可有之評議相決し過日阿州邸に勝房州山岡鐵太郎等抔相招き大久保江藤も同席にて段々談判にも相成候處七十萬石現地御引渡被下候は、屹度鎮撫盡力可仕旨確に御請も申上候趣に御坐候間遠江一圓參河十萬石合して七十萬石下賜候は引渡申候多分是にて始末も相附可申と存候内々承候處勝房州抔大に周旋努力仕候よしに御坐候間必鎮靜可仕候間御安心被遊候様奉願候會計之義も大久保始段々心配仕少々は商賈より借上猶金札施行貨幣通融方三井抔之見込も有之商法司相設候議に決し此好機に投し彼楮幣を行ひ候は、可然と評議相定り申候間多分融通相附可申猶此上は如何様とも盡力可仕候間此議も御懸念不被爲有様奉願候右之廉々も粗目算相立候上は速に

御發輦機會を不失様御進止被遊候義肝要と奉存候實に今日之機會と申は奥羽之形勢も前段之通に相運ひ當地之人民は疾苦に陥候折柄に候得は此機に投して御仁恤之御所置も有之候へは屹度再生之恩澤を可蒙時下寒冷

之折柄長途之御旅行御勞苦被遊候狀恐入候得共
先王寒夜に御衣を被撤候聖意御體し被遊候様奉仰願度然處頃日脱艦之一
件も有之候得は萬一京攝間に於て紛々論議相生し御動搖は無之哉竊に奉
懸念候固より初發御親征と迄難有思召も被爲有候程之事なれば萬々御動
搖御因循は不被爲有義と奉存候得共關以東之形勢は自ら貫徹不仕處も可
有之自然區々之議論より千載之大事を失し万民に信を被爲失候は決而
御失徳とも可相成杞憂仕候京攝之人情も遙察は仕候得共又東方之情態も
能々御勘辨奉願度候唯願は英斷果決衆議を排し區々之俗論に御頓着不被
有候様奉願候東府一同之志願此事に御坐候足下定而御苦勞之御事と万々
御察申候偏此上之御周旋奉依頼候

一山口範造越後府勤仕之 御沙汰奉拜承候然處東京府判事に申付同人專
ら盡力大に實功も相立掛候處に付唯今御引揚に相成候は、甚當感仕候
爰許も人材乏敷漸同人に申付候次第尤越後之方も開港之件も有之至要

と存候得共當府之情態不得止同人義御猶豫奉願度宜御沙汰奉願候先は
要用至急に申述度愚楮拜呈如此御坐候猶後鴻萬々可申上候敬白

暮秋初六

實美

岩輔相賢公

二伸時下秋冷爲國家厚御保衛奉祈候御東幸前別而御繁務想像仕候諸
卿にも宜御致聲可被下候吳々
御東幸之一件御遷延に不相成様奉仰願候兼而申入候通貴君には是非
御供奉企望仕候何れ
御東幸之上件々大に可議者有之候間御供奉無之は大に都合あしく
候間御繰合御東下有之候様奉專念候早々
例之亂書御判讀可被下候

六三 松平慶永書翰

「岩倉具視宛」明治元年九月六日

岩倉具視關係文書第四 (明治元年九月)

百十九

連晴適宜之候先以

閣下愈御清安令抃賀候扱は昨日於

宮中下官家來肥前公務人々承り候由東京頃來米價頗沸貴にて一兩に付七升買且又大根一本一貫五百文之由に御坐候兩に付七升と申亦は小生抔も是迄覺へ不申程之事にて極々下民共難澁と奉存候多分近來奥羽米江戸へ入津不仕義と奉存候大根其外諸色之義は沸貴いたし候亦もまたも宜候へ共第一人命之本たる米價如此に亦は實に王政御維新折柄東京之人民御うらみ申上候様相成候亦は恐入奉り候間何卒諸國東京へ廻米之仕法相立候様仕度候乍例心付にまかせ奉申上候尙御勘考希入候也頓首拜

九月六日

尙々貴答は明日御參於

宮中可相伺候間御答書奉辭候也

輔相公閣下

慶永

六四 伊達宗城書翰

岩倉具視宛 明治元年九月七日

此度東臨之節御旅中は可爲狩衣旨御沙汰候は庶民迄 御親征にあらず御綏撫之御趣意且 皇威之嚴肅を被爲示候爲に昌平無事容體に被 仰出候歟と恐察申上候於東京參 朝之時狩衣に御取極候とも御旅中は直衣垂取交勝手次第と被相改度長面長大之微軀當惑而已にはあらず雨中 御板輿之時抔御前詰之面々步行供奉之難澁は實に不可言今日より困却之歎話は時々承尤千萬と存候且堂上諸侯は烏帽子相用候得は威儀差等も有之可然近日に至ては中山卿の狩衣すきにても閉口之談候程之義故供奉堂上諸侯は異口同音と存候條是非 更に被相改度御繁務故態と以書付右陳奏候敬白

九月初七

御互に召連候供之面々も小袴勝手次第に相成度頗人情に適可申と奉
存候

輔相公閣下

宗 城拜

六五 片桐省介書翰「岩倉具視宛」 明治元年九月八日

岩倉相公殿下

片 桐 省 介

御次中

片桐省介、
名は直方越、
後の人明治、
元年岩倉に
召見し江戸
府補列事に
補せらる

謹啓仕候然は大久保參與登京に付定事事情委細言上可仕候何分此際 御
東幸之期御遷延相成候は治亂之係候處外各國之侮りを來し内億兆へ信
義を被爲失候様可相成既に
詔書を以被 仰出候御趣意府下始東北之民刮目感仰罷在候處萬々一失望
に出候は億兆之心眞以不可料畢竟與天地不朽之
皇礎は東北にあり府下之事も順序を以政は布き候得は人民之敬服吐口迄

も無御座不肖之賤臣府事出勤被 仰付過分無此上候間段々陳述候鄙衷は
大久保も承知之仕合吳々細目は不及言 御臨幸之御聖斷に天下治安之
道は一途に歸し可申奉存候鄙臣等之吐口恐悚至極仕候得共丹誠不堪默視
犯尊嚴高罪不可言恐惶仕候
越後信州鎮將府と決る管割相定り候方可然と奉存候其邊も大久保參與に
鄙見申置候間早速御決議被爲盡度仰望仕候夫是を始逐一言上仕度處府下
之義細務蟬集候處何分略楮之儘深く奉恐入候恐惶謹言

九月八日

直 方

岩倉相公殿下

左右御中

六六 岩倉具視書翰「清水谷公考宛」 明治元年九月十七日

秋冷之砌益御機嫌克御勤勞奉恐賀候當地平安無事に候間御懸慮被下間

敷候扱

主上も東京に

御出輦當月廿日と相定候に付萬事繁用に有之候尙當家も御供奉是亦御爲知申上候事

一此比日ロシヤ之様子承り甚懸念仕候に付兵隊千五百人は戰兵耳に候羽州表を御地に相廻し可申筈尙糧食器械等も夫々手當廻運候間不日に著可仕と奉存候

一會津は八月廿四日白河口を進撃三の丸迄打入り候趣米澤仙臺は追々降を乞候得共未御許容無之候得共無程平定可仕と存候

一御地は隔遠之處萬事御心頭奉遠察候一入爲國家御盡力奉祈候右等之大略主人を直に相認差上度存候得共晝夜之繁茂無寸暇に付代筆を以て申上候間此段よろしく御申上被下候様奉願上候頓首拜

九月十七日夜

岩倉家

清水谷殿

執事

御執事中

六七 松平慶永書翰

岩倉具視宛 明治元年九月十八日

一翰令拜啓候先以閣下愈御清安奉拵賀候陳は昨夕初め大典侍殿始めへ御面談申上其節帥典侍殿より 大宮様思召相伺候處乍恐斯迄に 上を御案思被仰上候御情實誠に以臣子たる者實に落涙難有仕合難盡筆紙奉存候就夫ふと心付候は春來段々自大宮様被仰上候儀に付督典侍殿三位局并御外戚之儀同殿迄段々 宣下被爲在候も畢竟 大御宮様厚き御世話被爲在候故之事に候然る處段々相考候得は九條前左府公には今に至り御落飾之儘に被爲在此こと如何なるもの哉と奉存候二條を始め昨冬御咎之人へ皆被免或は御役被仰付候者も有之然るに以前之儀は承知不仕候得共九條前

左府殿計御落飾之儘と申すは自 上被爲對 大宮様御義理合如何哉と心配仕候正しく九條前左府殿は 大宮様御親父に被爲在候事故 大宮様御厚く 上を眞之御子様之如く被思召候御情實難有餘り 上よりも其通大宮様御心中御察被思召落飾御免前左府と御唱歎又は御丁寧に相成候得は准三后 宣下と歎に相成候は、乍恐 大宮様へ之 御孝道も被爲在候候歎奉存候却る慶永不案内例之恐懼を不憚閣下迄申上候間尙御勘考奉願上候此邊は眞の 叡慮より被爲出候事故同僚へも御内々奉願候多罪御海容相希候恐懼謹言

九月十八日

慶 永

岩輔相公閣下

六八 岩倉具視書翰

〔中山忠能等宛〕 明治元年九月廿一日

前略高許

御道中筋高札太政官諸縣一切取除き候様相見へ右は畢竟領主名前等有之不敬に相當り候より起り候儀に付壹通り條理相立候處元來天下一般之規律將來不刊之常典終始可除之道理無之と存候雖然一旦被 仰出斯く被相行候上は容易に御布令被改候事も前後不都合不少旁に付眞の 思食を以如舊令揭示候儀不苦段被 仰出候は如何候哉左候は領主名前等は政府に於て取捨候は布令有之度存候尙諸賢之御賢考を請ふ實は 御途中不淨を除く之外下民之情境餘り不相包も亦養 君徳之一端と存候旁御相談申入候若別段御存意も無之御同意候は、 至尊親覽^{云々}之所御互に名前之所云々と申次第に致度此段内々議參御中へ御談し申候 叡慮と申義漫りに取計候様にては實に恐怖に付有様御談し申入候間早々御加筆願入候也

九月廿一日

具 視拜

中山 殿 御同意候

宇和島 殿 御同意候

備前殿 御同意奉存候

木戸殿 拜承仕候

大木殿 拜承仕候

二白 早々御廻覽今晚中御返し可給候御一同御異儀無之候は、臣明
朝 御出輦迄參入伺定候心得候也

三白 申入候明 御誕辰日御祝之儀は別段 思食も被爲在候間猶明
朝い細可申入候也

六九 岩倉具視書翰 [中山忠能宛] 明治元年九月廿一日
今日も快晴益御機嫌能被爲渡日々 行幸實に天下之幸何事か之にしかん

今朝今晝參入勿論候處少々不快恐入候得共御泊の伺候義に御宥免冀上候
尤御用被爲在候は、速に參入可仕候此段宜敷御披露願上度如此候也

九月廿一日

具視

中山議同公

不待貴答

昨夜大原夜申過迄議論大草臥之所困迫候事に候併彼一事全く作物と申
事相分り一笑之事に候也

乍憚坊城にも本文御申傳御用候は、休所に被申越候様相願候也

七〇 德大寺實則書翰 [岩倉具視宛] 明治元年九月廿一日

聖皇益御機嫌克御旅行奉大賀候御留守御靜謐御放念可給候貴君御壯勇御
供奉恐悅候扱は去十六日夜

由基一御鳥居倒臥に付別紙度會府より到來呈尊覽候決る災祥之説に御動
搖被遊候譯は不被爲有と存候得共偏爲御安心別紙入御覽候仍早々言上如
此候不乙

九月廿一日

實則

輔相卿

呈侍史

副啓兼家之雅慮入御覽候也

一條天皇

帝登極之日有司設位忽見大極殿御牀側有血鬪體大驚不祥走白兼家兼家方睡不應再言如初乃跪待之兼家乃爲驚直問儀設已成否其人忽悟大儀將成無可更理相公故爲不聞乃爾遂不言而罷妖亦不徵

別紙建言書

內宮權禰宜之者に當當時當府書記履に御座候然に御出輦御治定期日急迫に御座候條委細取調も不仕不取敢其儘御進達申上候也

附り冠木御烏居顛倒は相違無之然に全く時至腐朽故に候由併風は無之

時に相聞へ申候賤民落命は風説は承り居申候得共仕丁

宮中自及は風説も未承候

度會府判事

九月十八日巳刻

辨事御中

寒冷之節

聖上

大宮益御機嫌能可被爲渡恐悅奉存候

神宮益御靜謐之御事候貴官御一同彌御安泰御勤仕珍重奉賀候抑昨十七日

太神宮神嘗祭爲檢知出役仕候處第四御門外冠木烏居十六日曉無故顛倒候

趣從祭主二位承候に付不取敢河田精之丞同伴見分折口熟視仕候處心に到

る迄腐朽候に付時節到來自然顛倒之事と存候得共何分不容易事に候間早々及言上候尤此義從祭主も言上可有之候得共爲念如此候從祭主も先内々言上之趣に候間密々言上仕候表向奏聞仕可然と思召候は、宜御取計願存候也

九月十八日

追亦本文申上候顛倒之鳥居先如元建置可然哉に祭主と示談仕置候得共退亦熟考候得は右様之重事不待勅裁私に取計候儀恐入候間先其儘に爲仕置候尤此等之儀は當府關係之筋にも無之とは存候得共祭主相談之末に候間旁相伺候猶祭主言上候は、其邊御含宜御沙汰願存候以上

神祇官御中

實 梁内啓

七一 松平慶永書翰「岩倉具視等宛」 明治元年九月廿一日

一筆奉啓上候秋冷追々増加之處先以
皇上益

御機嫌能被爲入就中昨日は無御滯

御出筆被爲在奉恐悅候別亦

御旅中寒風

御障動不被爲在候哉

御旅行之所も如何

行宮夜々

御格子等も甚以御案思奉申上候

御物并

御兩用等も如何哉も夫而已不堪痛憂案勞存候何卒

兩閣下にも此上とも能々

玉體御保護奉依頼候隨亦

岩倉具視關係文書第四 (明治元年九月)

閣下愈御清安御旅行奉拜賀候北越報知從國許昨夜飛脚着にて別紙之通差
越候間差上候御落手可被下希入候

一大宮

御所

桂宮益

御安全御靜謐奉恐悅候御序に

御奏聞奉願候

一御内儀無御滯今朝御發途相成申候

一明日

御誕辰に付群臣へ御祝拜領に就るは第一

大宮様へ被爲對

御祝被進無之候るは御不都合殊に

御留守中之事故三千疋御祝として

大宮様へ被進候取計候旨中御門殿被申聞候此段一寸申上候

一此外何も相變候事無之先は右如斯に候也

松平中納言

慶永花押

九月廿一日夜

岩輔相公

閣下

伊達宰相

尙々時下御自愛專一奉存候扱又昨夜より議定一人つゝ參宿小生相勤

め申候夜中

小御所

御學問所邊見廻り火の元別る入念候様辨事へ申聞候今夜徳大寺殿柳

原殿被相勤候追々可申上候也

七二 松平慶永書翰

「岩倉具視等宛」明治元年九月廿一日

臣慶永謹奉言上候抑去十六日夜丑の刻

神宮華表轉倒之怪異は實に奉恐懼驚愕事に候得へとも頗抑留

御東幸する姦策なるへし其ゆへは山田大路より師岡迄の書狀而已にて度

承知有之由鷹司被申候

會府判事元田氏への報告今日までもなし元田の建言頗感服に堪たり正徳

兩准輔相より呈達せらるべし故に

御通輦聊無御掛念

上御始供奉之面々快然尤滅怪異之十倍の勇進を以て勤仕し給へ左なき時は妖のために搖動せらるゝこれ妖に負け妖益勝誇變吉爲凶會賊乘其虛天下の平定遂に再亂を生すへし希くは以

聖明の威徳消滅怪異百官公大の忠厚を以掃攘す妖何そ妖をなす事不成これ天下之平安たるゆへんなり愛度古例別紙を以みるへし乍去人心搖動之基に付議定而已相心得他へは漏泄するを禁す閣下これを酌量せよ不宣

九月廿一日

慶永

岩倉具視 岩伊兩閣下

七三 岩倉具視書翰「大原重徳宛」明治元年九月廿三日

爾來御途上好天氣至尊益御機嫌能被爲渡御同然奉敬賀候抑過日は遠路態々御出馬御誠忠を以御建言之件實に不堪感銘雖然凡事有大小輕重此盛舉決る非尋常一樣御事則懇々言上候通深永久之御旨趣に被爲在候義に付敢奉背 神意之道理無之と存候自然人事を謬候へは 臣等執事輩之大罪天地無所容次第假令如何様 神罰を蒙るとも死猶有余儀に御座候就るは御約にまかせ別紙之通り竊に誓

神明候間老臺迄差出候拙義只管爲國爲民痴情御憫察是祈御一覽後御火中可賜只死後千載之知己を待耳草略余は後便と申殘候早々不備

關宿

具視

九月廿三日

大原中納言殿

殿御方へも宜御鶴聲可賜候也

臣具視誠恐誠惶遙

奉告

皇天

皇祖神宮祠前

皇孫

今上夙嗣

天位親聽萬機戰々競々夙夜不怠大有所興起獨奈時值兵亂加之奧羽未靜東京人口殆困飢渴於是乎斷然有巡狩之舉將有舉親恤之典以施東西無偏之化非敢好逸豫也 臣具視謬辱輔相之重任與百官有司贊成之行儀既備去廿日

車駕將發於 宮闕有人告

神宮華表木無故而顛矣曰此行也

神或不欲也 臣斷焉曰決無斯理矣朽木之顛常勢之所使然雖 神不能支不啻

不支亦所不用意也

仰惟

皇孫

皇帝之立也明德匪不馨誠意匪不通 皇天將來格決無斯理矣此盛舉也續

神武之遺志爲民爲國 神之所冥助 皇化將東被鞞鞅決無斯理矣夫天理人

事固一本也豈徒蒼茫空虛乎若或人事之所不盡 臣非職之罪耳當其責矣在天

皇祖以 臣之身代之敢所不辭也嗚呼 皇天后土庶幾垂憐 臣之微忠焉 臣頓首

稽首謹言

七四 三條實美書翰

岩倉具視宛 明治元年九月廿五日

秋冷之節御座候處

皇上益御機嫌克御旅幸可被遊恐悅恐喜奉存候各位益御勇健御供奉可被成
珍重存候誠御東幸之義も斷然御英決御發聲に相成實
神州之幸甚蒼生之至慶此事に御坐候足下之御竭力萬奉想像候誠小生も御
分袂以來御疎濶欽慕に不堪不日拜芝相樂居申候先當地も追々穩に御坐候
間御消念可給候此度香川敬造御途中迄差出奥羽御所置方之義奉伺候委細
同人より事情御聞取可給候實に奥羽之御所置は御大事と存候小成速功を
不期御英斷を以御處分奉願候仙米祿高削奪之義篤と御評議之上神速御沙
汰奉願候蹤合いか程御寛大にても仙二十萬米十萬より多分に不相成様御
盡力奉祈候定る寛大之議論可多と存候得共此度屹度御處分無之候ては是
迄千辛萬苦力戰仕候兵士之功も水泡と相成候は却有功之者失望之姿に
も可有之信賞必罰嚴として不可犯之御所置天下を制御する之大眼目と存
候偏御竭力奉仰候先は要事而已一筆拜呈如此候萬不遠期拜眉候略札高免

可給候頓首

九月廿五日

實美

輔相公

二仲御旅中別々御保衛奉仰候扱遠州を徳川の賜候事狀は委細大久保
より承知と存候就るは移封之藩々人心も動搖折あしく御東幸之御道
筋自然不都合之義は無之哉と日夜懸念仕候よろしく御處置之程伏奉
願度候以上

七五 松平慶永書翰

「岩倉具視宛」 明治元年九月廿六日

昨日は於

宮中得拜顔大慶奉存候爾來御清安奉拜賀候抑一昨日夜國許より北越捷報
之概略 書付奉差上候其節取殘し相成候書付并村上城圖差上候御留置に
て宜候此段申上度如斯に御座候也

仲秋廿六日

輔相公閣下

慶 永

(別紙)

北越出張先々差越候書狀寫

八月十五日

一 昨日小松へ斥候に出懸候瀧勘藏罷歸申達候は石間の賊十六日八ツ時過る引色相顯れ候に付味方探鐵炮打掛け候得共更に應炮も無之全く逃去候様子に付味方早急進軍同所關門臺場を取遊撃隊一番乗之札を建石間村兩三軒を放火いたし候事に候其所へ又々枋屋政之助手を報知有之賊臺場を自燒引色に相成候に付俄に進軍いたし候との次第に候如此賊何れも堅固之要害を捨て引取候儀全く赤谷口官軍進入に相成候間も有之其外如何様之敵情に候哉畢竟内顧之憂には相違無御座と存候扱又新潟口御人數も追々進軍村上城も容易に乘入既に鹽ノ町を葡萄崎迄押陣に相成候段彼是千萬之御都合と存候

○又奥州口も二本松迄攻取白川口も漸々押詰候由に候

一十七日朝酒井孫四郎家來岩間迄斥候に差出候處同夜罷歸申出候は遊撃隊始石間關門并臺場へ乘入候處賊關門際に踏落し之地雷火仕掛置忽然と相發し村人足壹人即死に相成且分捕之内白砂糖有之薩兵相嘗め候處四人毒に當り瀕亂直に戸板に病院へ相送り候との事に候右地雷火邊遊撃隊頻に歩行候得とも不相發人足歩行に至り相發し即死人足に止り候儀幸福不過之候遊撃隊中に分捕粗白米等數多有之候得共毒之懸念も候故食量に致し候儀は嚴重に留置申候且又津川之方へ當り火の手相見へ申候如何之景況歟未探得恐くは官軍吉兆にも候哉と歡喜いたし居候

一此間召捕候水戸人兩人五泉會議所へ御達有之今十九日村松城下迄川村隆輔へ兵隊指添護送之

一但水戸人兩人召捕候儀は五泉表會議所へ相達候事
一新發田街道津川筋之參謀を小川通之方會議所にて長藩田中利助方へ申

來候由は新發田街道赤谷邊へ官軍進撃之處賊方も新發田城乗取手筈
に凡五百人計之勢に押來候途中赤谷邊に双方不圖行合打合に相
成候處官軍速に間道へ迫り打立候に付賊軍敗走終に赤谷口進軍最早津
川迄之所は諏訪峠之嶮迄乗取候も程有之間敷との事之由

七六 德大寺實則書翰

岩倉具視宛 明治元年九月廿九日

追日秋冷相募候處 主上益々御機嫌克御旅行被遊恐悅候隨而尊卿御初各
位倍御安康御供奉珍重存候陳者別紙三條書束昨廿八日到着候間入高覽希
賢斷候且議參評定是亦呈覽候
一岡田準介獻言一紙入高覽候
一三岡辭表勿論被 召止候儀と存候得共御差留之御振合一應相伺度候
一松田正人獻白至極之論と存候入御覽候
一御一覽後大木民平へ御下け願入候

一諸侯從來國名所名を以姓氏に替へ相用候へ共向後總而姓氏を認め可相
用哉併松平姓坏數多有之候間甚紛敷候間先是迄通可然乎仰賢斷候
一西村鼎政體上に付獻白入高覽候
一紀州御所置之儀刑官に速に糺問有之候様申入候得共大原土肥等にも井
田政一郎之罪條篤と承知も無之様子何のケ條を以取調候哉被尋出候次
第甚當惑之趣に候罪過之件一應相伺度候
右之件々相伺度候乍御旅中不相變御鞅掌繁劇奉遙察候御留守洛中洛外至
る平穩偏に御安慮可給候今日は新井御渡海殊に快霽都る御都合御宜と奉
察候何も勿々呈寸楮候恐惶百拜

九月廿九日

實則

右兵衛督殿

副啓逐々冷威増加之候御自愛專祈候也

七七 香川敬三書翰「岩倉具視宛」 明治元年九月

頓首再拜謹言上仕候益御機嫌克被爲在御座候御儀と奉恐悅候且打續御多端之御事と乍蔭奉恐察候次に小臣も無異謹勤仕居候間乍恐御安慮被下置候様奉仰願候抑過日愚札奉呈仕候處御落握に相成候や如何案痛仕候一去月下旬より會津城攻撃取掛り候儀は言上仕置候處存外彼之國風頑強之事故未だ陷落に至り兼出兵先よりも度々援兵を乞候次第に付在府之兵隊追々操出し只今に於は滯府之兵尤も減少仕益次郎始め心痛致居候に付今般豫備之兵二千人迅速御差下之儀當府より軍務官へ進達仕候間定而急速御運には可相成事と奉存候得とも尙苦心に堪へ兼大村とも示談仕小臣よりは殿下へ言上大村益次よりは木戸へ申越筈に相約前件言上仕候事に御座候申上候迄も無之自然會津陷落遷延之時は奥羽一般之關係は勿論御東幸之大事件迄に差障可申と竊苦痛罷在候に此邊は兼而より御配慮之御事故今更申上候迄も無之候得とも不堪杞憂言上仕置候

一仙臺上杉降伏事件は大村益次より委細木戸へ申越候事故小臣よりは不申上候

一過日下向之節段々御配慮筋之儀は直様條公へ言上仕候事故定而其後條公より申上候事と奉存候民政市政等之儀は小臣等は更に耳に入尤も掛り之者有之愚生等か口を出す事は素より出来も不仕右方は一切沈黙之事に御座候又人にも夫か爲に悪まれ不入事をする云々右御賢察可被下候一鎮將府に於は何を致居候事哉一切不相分候北島等より民政向市政等之儀は申上候事と奉存候小子は條公へ一度拜謁之儘尤東下後なり其餘出頭候事も無之大村等も餘り登城無之候大總督府は西丸下鍛冶橋門内因州屋布也鎮將府は城中に被立置候東京府烏丸卿も和州郡山屋敷に相成居候一市中は先鎮り居候方に御座候

一徳川軍艦も終に脱走過日下總銚子港へ漂着尤も激風之爲に沈没之由人數三四百計上陸處々横行討手等之手配りは素より相立少々は捕縛も仕候

只今に於ては餘程方付申候

一北越之官軍は津川口に於て被拒候哉如何歟音信不通已に白川口官軍は若松城外郭燒相迫り居候得共右北越官兵不來候間白川より進候兵寡兵と之事に御座候

一脱艦二艘豆州下田へ漂着之分は駿州清水と申港へ竊に入津之様是も手當最中に御座候先達之肥前薩兩人も其方へ申付出張之事に御座候
一至急兵隊二千御差下し御決定に相成候は、海路より御差回し奉願上候
必ずも此邊御盡力奉懇願候頓首々々恐惶謹言

九月十一日急使軍曹鈴木三樹三郎附屬之者を以て愚翰を奉呈す恐入候得とも中殿様 若殿 長官様へ宣布奉願上候 若殿様御荷物も松井某持參明後日出足之手都合に御座候右兎角用向運兼遷延相成候間御斷申上置候重々恐縮此事に御座候間平に御仁免奉願上候百拜

香川 敬三

言上

御側衆中

御執述

大急き相認候間大亂筆御高免奉願上候

七八 大原重德書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年十月二日

輔相源公閣下

重德

追々寒冷相増加候御道中如何可被爲在哉益々

御機嫌好御進行可被遊恐悦不過之候次に尊公以下供奉御一同御平穩珍重

存候陳は此程の紀藩人召寄三人内一人途中の所一人は三浦久太郎今一人は

名前只今不覺候三浦相尋候處是迄見込違ひ全心得違ひ恐懼之旨申答候如何先此

分今一人は速にケ様と申對も無候に付毎々徳大寺殿御催促に候へとも慥に確證あつて是は如何にと差詰相尋糺問と申廉無之に付中御門殿へ

及御應對候處尊公より出候事故慥なる御證據可被爲候へは御道中へ御尋可申入被申候に付乍迂縁幸便を得相伺候乍御面働屹度證據に相成候程之御書取直人に成被命拜領相願度存候屹度鞠獄者に證據なくては強問と申場合にも參り不申甚心配掛り之者も當惑仕候へは何卒右申上候通證據相願候仍早々要用耳只今三日切之飛脚出候を爲待此文相認差上候右に付過日之御答も不相認真平高免願入候早々大亂書可被免候也

十月二日於廊下認

二白 此頃之天氣連誠難有存居候也

七九 德大寺實則書翰岩倉具視等宛 明治元年十月四日

寒冷候 聖皇益御機嫌克御旅行被爲遊御都合一事無間然趣恐悦不過之候隨而各卿御奉職御勉勤奉遙察候陳者去九月廿二日會賊父子官軍陣門に降伏致候趣別冊肥前藩より届出候間早急奉差上候巨魁伏罪千喜萬悅稱萬歲

候迅速言上呈楮札候也

十月四日

岩倉殿
中山殿

實則

八〇 德大寺實則書翰岩倉具視宛 明治元年十月四日

右兵衛督殿

實則

乞親披

副啓

- 一 藩制御布告書 御出輦前御發無之候機會を失ひ候間 御着輦後於東京御布告被爲有候方哉と存候尙賢慮伺度候
- 一 安藤飛驒守儀五十日を限歸邑願出候右は 御出輦前尊公思召も有之由に付一應相伺候

- 一 肥後藩入江八千兵衛今度藩藉に復し再上京格別正義之者由今度度會府權判事申附候間此段申上置候
- 一 五島飛驒守家來白濱久太夫事格別之人物屹度御用にも相立候間權判事被仰付るは如何哉岩下より申出候間賢慮相伺度候事
- 一 大垣拜借金歟被下歟彼是混雜致候へ共漸決定五萬兩下賜候事評決明日可被仰渡治定致候

一 内藤家來之事栗園を逐々承り精々勘考仕居候

一 昨今正三不參下拙壹人何とも當惑至極に候書面疎漏萬宥希入候事

十月四日

實 則

八一 岩倉具視書翰

「德大寺實則宛」 明治元年十月十日

- 一 三岡辭表來示之通御抑留然可と存候就中木戸見込も有之同論に存候尙亦伊知地壯之丞當局出伺之儀に付三岡等篤と及談合將來會計之基本確

乎相立候様可及戮力旨御説諭冀處に候

- 一 松田正人建言示諭之通書面は大木に相渡し可申候尙木戸見込附紙入御覽候孰政體屹度一定致し議事等被相行候上は藩制も隨ち相舉候半と存候

一 附り西村鼎政體見込書同上大木へ相渡可申候

一 刑法官紀州御所置之儀中島直人の土肥謙藏迄い細可申入様申達置候間

一 其向の御承知可給候

一 肥後藩入江八千兵衛度會府權判事被

一 仰付候由致承知候

一 五島飛驒守家來白濱久太夫事岩下推舉にち權判事被

- 一 仰付度之儀承諾然處辨事局御人且々相濟候は、諸府縣權判事に被仰付候るは如何哉尤差向き辨事局御無人又は人材之適否も有之候儀に付今一應御賢考可給候

一 藩制御布告書

御出登前御發令體に相願置候様愚考罷在未だ御布令無之候へは早々被仰出候様御取計可給候

一 安藤飛驒守儀歸邑願之件東京着之上今一應御答可申候

一 大垣下賜金之儀兼申入候通是非有之度存込候間御治定之段尤御同意に存候

一 内藤家來之事古豊後守之續きも有之儀に付兼々願置候通尙又御盡力偏に御頼申入候

一 正三室所勞に付不參別御劇務致杳察候尤別勅を以當節は出仕可有之と相考申候其内可然御傳聲御願申入候

一 諸侯從來國名所名云々着之上三條等談合更に御答可申入候

十月十日夜

德寺大 人机下

對

正三卿室實に氣毒同卿へ書狀も可致筈に候得とも何分繁多乍憚御序によろしく御傳聲希上候也

八二 三條實美書翰 [岩倉具視宛] 明治元年十月廿日

寒威頗難凌候御清適奉賀候御不例追々御恢復に御坐候哉御自愛奉祈候扱過日御書中被示候會計の御互に申立候金之義辨事の相達之旨承候若會計の御申立之御書取にても有之候は、拜見仕度候

中山百金大久木戸大木三百右は夫々相達申候薩一万五千長七千五百戸田大和守歸京に付京師大宮御始内外へ被下之分五百兩計

右之廉薩長兵隊之分は池邊より請取其余は坊城より請取申候任御尋申入候

一 三岡八郎も今日着付仕候大會計目途楮幣等之義も屹度一定候様猶追々議可申候何分今日着未當地之事情も不相辨何れ明日は東京府に於て大

木とも集會談合之筈に御坐候猶御賢慮も候は、被仰合候様希入候
 一 徳川慶喜之一件外間段々議論沸騰頗有志輩瓦解之情態甚以心痛仕候阿
 州余程苦心段々内々談合も有之候旁徳川の御沙汰之義も遷延候明朝は
 阿州も來臨之様子に候間其時宜次第猶御相談可申候
 一 奥羽諸藩所置之義も段々延引に相成候是も軍務に於る夫々今一應精細
 取調阿州專取掛り四五日中には片付候様相談仕候
 一 奥羽民政是も未決議に不至頗心外に候何卒御見込之處御書付給候様希
 入候

右之如く事々寛滯一事不舉全我輩之罪無所逃奉恐入候何分微力に行届不
 申恥入申候竊に願くは參與判事等へも今一層委任して事を行ひ候様に相
 成候は、大に可然と存候唯日々紛小田原評定にて實功少く歎息仕候併
 是も策鞭駕馭之術を不得より所致と存候へは實に僕等之責に有之候何卒
 精々御保養早く御出勤被下候は、大に力を得可申偏祈望仕候

一 津輕より肥前人來着別紙報知候入御覽候御閱見之後早々御返し願入候
 先は右要用而已得貴意候猶小事は俊實朝臣を以可申入候勿々頓首

十月廿日

實美

岩輔相公

八三 大橋慎書翰 [岩倉具視宛] 明治元年十月廿日

至急建白

慎三

臣抱腹懶々狂者敬白

先年 殿下に青樓に陪するの堅約ありて未だ果さず遅緩極まれり然に近
 來登樓の制止嚴密なるの勢を見ては逆も陪從は期する事難らん矣左れば
 逆 殿下因循遲滯遂に前言を食むに至り玉ふては 皇國男子の道立へか
 らす且つ是れ迄遷延の罪既に許し奉り難し依是償金十圓即刻下し賜るへ
 し臣之れを以て入谷を品川に提げんと欲す抑開關以來未曾有の一新將に

に實を關東に施さんとする今日に當り堂々たる輔相公先づ前言を復れ信を抱腹豪傑に失はず且つ其の餘光を天下の大窮民婦女子に迄及ぼさは實に皇澤是より治きの淵源疑ひなし故に臣爲天下恭建言する事如此殿下將に以て奈如せんとす臣抱腹一時の狂言を呈するにあらず眞面目正襟を言上する所也唯迅速償金の下臨實光あらん事を是れ仰く如何々々恐懼恐懼頓首百拜

讀て狂句々々呑酒百杯と云ふ

十月念日

抱腹朝臣

輔相公殿下

八四 伊地知壯之丞書翰

岩倉具視宛 明治元年十月廿七日

頓首再拜謹一札奉捧 左右候寒氣日々相加申候得共御道中無御滯増御機嫌克御安着被遊恐悅御儀奉存上候 御着後内外之事件一日御萬機時

々々御繁雜に被爲渡候半殊に關左は自古昔慄悍之氣故御恩惠迄に御鎮撫爲調兼一層 御高配之御儀と奉存候御發駕前拜承仕候會計方一條に付猶又御中途覺悟尊翰被成下難有拜見仕候不肖愚鈍之至に御座候得共微力丈は奉盡格讓に御座候於 京地三岡に引合仕候處會計方京都府に合併に付致混雜居近々中下坂之合罷在候付於大坂篤と可致談合と申合私には去る四日下坂仕後藤象二郎は一夕緩々面會仕愚存之程細々申述候處至極之同論に後藤申には會計方之取扱迎も今形には相濟間敷色々下より苦情申立今日も致言上候者有之心配中に候間私に存慮之件々三岡に委曲可申説其上後藤も可致談合承り其後三岡に下坂仕候付別紙貳通相渡右は大綱立存慮之次第はケ様とケ條書之趣意附演仕懇々申説候處能引受に異論無御座候得共人之説を悦ぶ用る模様にも見受不申尤三岡申に遽に御一新伏見鳥羽之戰爭を引續與羽 御征伐相成臨時之御用途打重り當座を相辨候迄之譯に今日に立至次第候承り右等は小子も能々御察し申上

候儀に於全く是迄之處を御督責申に於は無之今日より以來之處大體を相居へ本筋之會計御取扱相成度乍不及愚見丈は申上御補助申度論談仕又々兩度面會仕存慮申出置極々丁寧に待遇毛頭被相拒候儀に無御座候得共速取用相成程如何可有御座哉と奉案候何分大着眼之處相定り居申候哉と見當相付不申候猶追々心情吐露說得愚力一杯は相盡考に御座候私見に於は只今之御取扱に於は萬々會計之大體相立下々之故障相止期有御座間敷奉存候別紙の内會計方其器に不當人は被差免度と申ケ條は相除き三岡に相渡申候承り候に會計方には邪曲之人數も段々有之向に御座候下之人氣之向背且現實之舉ると否とも人次第に於第一之事に御座候得共此節會計方大坂府に引渡に就る人丈は其儘被召置候様三岡を分る申候段承候間初發の氣請を損候は議論之媒に相成成功無御座と奉存差扣申候別紙の内出入之度を量り局々之定りを付不足も候は、補之道相立云々の儀は會計之大眼目と奉存候三岡之見當も相尋候得共未だ承り得不申一々見當通に

は參り申者にも無御座候得共大段之定り方位は定り居不申候は海陸軍興張皇威海外に相耀期有御座間敷奉存候再三再四に及三岡の懇々と説入是非體用相立申候様可仕存慮に御座候遅々罷成處遺憾に奉存候先は今日迄之形行奉言上候乍恐寒威日々肅殺罷成候間爲天下御愛護專用奉存候恐惶頓首敬白再拜

明治元 辰十月廿七日

伊知地壯之丞

輔相公閣下

乍恐 鳳輦御安着爲天下奉大慶候

辰十月廿七日

伊知地壯之丞

一金札之儀 現金同様致取引候様被 仰渡置候得共猶又 御評議之趣有之以來は直成之昇降世上之相場に被任候旨 御達相成度事

但當分通不可行數通之空令を以現金同様致取引候様如何程御達相成候も却下之人氣を損し益札威相衰候迄に寸益無之而已ならず無科之罪人を許多生し且現金を以入付置候者此節請取候事に至り札に候は、壹萬兩に付三千兩餘之損失に及び又迷惑も致し其外弊害不鮮候間本文通相成申候左候は、是迄之銀相場之振合に罷成金銀鉛之釣合自然と相立融通宜敷罷成外國人取引も相調外國人々之運上銀も相場を以致上納御損失無之其内後條之現金を以引揚之道理相立候は、不遠して現金同様相成は案中と奉存候

一府藩縣にも前文同様相場を以無滯可致取引其支配を丁寧反復申諭し一同開け立候様御仕掛之事

一御軍艦御備付之爲金銀地金 御取入御鑄造之上別段被差分置事候間右約條之地金一二倍相増し御注文御軍艦代御拂濟相成候も引續き御鑄造右利潤金御差分け慥成富商兩三軒に被仰付相場を以内々々時々金

札引揚之御趣意相立候は、札威忽ち相立可申事

一銀相場は今成被差置可然奉存候事

○

一日本中之戸數人員公領之上納高且海内之山海川澤田畠之作毛諸産物各藩之作毛産物迄も取調候儀は會計之本職に候間別段論に不及事

一前件御取調之上は 朝廷上を府縣年分之用金海陸局其外之御用途一切相糺し出入之度を量り若し不足も候は、別段補之道可被召建事

一佐渡其外之金銀山は猶又一層御手被爲付外に御趣法被召立手に應し候丈米國之金銀地金年々御取入英佛國邊之金銀貨同様之位に他日貨幣御鑄變之基を開き被置度事

一政度法制賞罰與奪之權は上に持し些も下の假借せず金銀錫之然る所以之權は上に握り右金銀鉛之相場且諸色之直成は全く上を御沙汰無之下に被爲任候儀古來を定りと承り候右大體に相立て不申候は混亂

に及歸着之期有之間敷事

一前件通之定に米穀諸色之相場は四時之代謝に齊く世上之沿革人氣に従ひ昇降流動いたし人力を以不可制止者故世間之相場に被爲任上よりは米穀諸色之都會に入來候様御仕掛相成度量を給き賣買いたし世上之難澁を不顧一手に買占金を借し法外之高利を貪り又は奸曲之致手數候ものを嚴重御取締有之度事

一外國商法之儀是迄小商人共目前之利益を貪り致取組彼を被致候事而已に膏油を被吸取候場に當り此儘に大疲弊に可及候間開港之地は本邦之商人共之類を以商社を爲組公道之爲致商法其益有之候様御世話有之度事

一會計局之致關係候府縣之取扱大綱は致差引其餘は都其向の御委任何事等有之折は即時に御決定御差圖相成度事

但府縣之取扱差掛之弊害は相除き餘は可成此涯舊貫に依り候様有之

度

一會計局之役人之内其器に不當もの段々有之向故邪正

被相糺不正之人數は早速被差免度事

一是迄都會商法之惡弊衆人之害に相成候事共は御糺之上被相除度事

八五 大橋慎上書〔岩倉具視宛〕 明治元年十月廿七日

言 上

大 橋 慎 三

謹白拜命直様彼宅へ馳付け候處門庭甚寂寥に付如何と掛念なから取次に面會承り候得は既に御着輦前當月十一日舉家駿州へ轉居仕候趣何とも遺憾之至に奉存候乍未だ用向も有之候事故當月中には一寸舊宅へ参り度旨申置候趣に付朔日頃には臣又相尋可申奉存候當歸路駿州に面會可仕候事宜も可有御座やと相考居處承合候處則府中傳馬町本與力朝比奈屋敷勝安房宅と尋候得は相分り候由に御座候此段復命仕度參 館之處未だ御

下り不被遊候間呈書仕置候 臣回考仕候に右近邊に未だ轉居不仕候様子
承り候は則虎門丸龜邸金比羅の日に當月十日の事に御座候其翌日出足
に有之候し也過日拜命の後轉居に亦も仕候得は臣懶々之罪何を以て可
謝と甚恐縮之處實に大幸と 皇天を再拜仕候不可以不慎後來矣入權門候
とケ様の事がこわい故懶々に御座候蜀魂は不如歸と鳴き候由即今は臣も
不如歸頓首百拜

十月念七日晡前

慎 三

尊 下

御衆中

八六 東久世通禧書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年十月廿八日

厚鐵船若借入不出來に候へはたとへ十萬兩廿萬兩入候ても是非に開陽に
敵する堅實なる軍艦借入候て彼を破壊致さずては後患可有之と大村益次

郎申居候間何とか談判相整度企望仕候

一陸軍は已に出兵候得とも尙又備前兵商船借入可相廻候趣に御座候
一別紙二通入覽候今夜は大風濤小蒸氣にて渡海六ヶ敷俄に陸路揚鞭明朝
六時迄到着の積發蹄仕候尙早々歸府可奉申上候以上

十月廿八日十一字認在中

通 禧

岩 公 閣 下

(別紙)箱館在留副岡士ライス義二ヶ月程以前より此表へ罷越居候處今廿七日第
十二時過裁判所へ罷出箱館表之儀に付別紙之通申立候間譯書并引合書と
も差進申候委細右に付御承知可有之候以上

十月廿八日

神奈川縣判事

大 總 督 府

參謀御中

追て若外國船御雇相成候は、昨日箱館府附屬伊達託太郎長野昌英乗組

罷越候英國モナ船相雇候は、辨理に可有之其外御雇付相成候は、右の外にも有之候

一急御用の節は直に及御達候節西城御門口通行鑑札十枚急速御廻し可被成候

一本文の趣昨夜中出府爲致候伊達託太郎外壹人よりも御承知の義と存候以上

箱館在留亞國副岡士ライヌ十月廿七日裁判所へ罷出申立る

一西洋第十二月二日徳川脱船七艘内四艘は軍艦にも可有之箱館の内ワサノ井箱館より七八里程離ると申處へ凡四千人程の乗組にて罷越内千人程上陸いたし候由いづれも徳川脱走人の由

一箱館に罷在候兄ライヌ同所にて承候趣は右之者共儀蝦夷を取其上徳川政府を建戦の旗を建参り候は、戦争可致心得の由若平穩の旗を建参り

候は、和睦いたし候由

一右の次第仙臺より 天皇に壹封呈し候由

一御軍艦かゝのかみに乗組候官軍千五百人箱館表に罷在候由右の内九百人は先達て神戸より相廻候兵隊にて五百人は秋田藩の由

一小野と申候處箱館より凡五里程離るにて官軍五百人脱走人九百人にて戦争いたし居候由

當二日軍艦七艘ウラルカンベールⓈに入津しワサノキは千人の軍兵上陸せり右軍艦より箱館に於て書狀を落手せり其書に曰く右軍艦は日本より放逐され國中身を措に處なければ蝦夷を取り其處に徳川政府を建んとす官軍若し戦を挑まは應して相戦候和せんとせは官軍を守護すへし仙臺より一封の書を 天皇へ呈し今其 勅答を待てり彼等は高位のものにて回復を事とす彼等の此事を企つるは其本國のためにして悪しき旨趣ならず彼等平穩にして其地に止らんと欲す然れば官軍戦闘を欲す

れは彼等亦其身護衛のため應戦せざるを得ず

徳川浪人調印

官軍 九百人

第十二月一日 神戸より

同 五百人

同 秋田より

終にをのにて戦争始りし由をのは箱館より距る十二里

此末不相分

⊕ もり 欠 は箱館より三十五里

八七 柏木總藏上書「岩倉具視宛」 明治元年十月

一札之儀京坂の店は勿論其餘も渡世向に寄候るは兩所之模様追々傳聞敢而難義相唱候程にも無之哉に而兩替屋共義は内決心譬は壹兩分兩替申來候得は貳分は錢貳分は同じく札貳分兩替申出候ものは壹分錢壹分は札相渡皆引替を及斷候位之事之由唯々御趣意柄不相辨小民共彌以

物價沸騰可致哉と恐怖當感罷在候趣左候得は先つ以窮民御救助之御趣意能々御布告産業無之ものを始として夫々厚く御世話之手續は惣而大坂之振合に倣へ爲御取掛可然御儀歟

(原朱書) 關東は素々銀目六拾分替に付大坂之如く板銀通用御差止より兩替屋共手形取引等に響き候様之義も無之是は一段之事

一然る上は

御東幸を相樂一日々々と漸々今日迄乍艱難も相凌來候窮民一と先安堵御仁恤相顯候様可罷成哉尤掛り役々各懇之上にも尙懇々我愛子之廢産を挽回爲致度真情を以丁寧反復教諭爲仕度

(原朱書) 天龍川切所其外御普請向之義會計官權判事岡本健三郎は御委任之處當官の聊之御金も持參不仕繼之日合を以既無御滯

御通輦被爲遊候次第に至右は畢竟

天朝之 御光徳左も可有之筈隨而健三郎申諭方等も行届候義とも奉

存候

一右之通に御座候得共自然役々異論有之區々之論方等仕 御趣意柄貫徹不致候亦は大害を醸候義勿論此義御賢慮被爲在度金札而已にも不限惣亦有司之向右様之次第には下々疑心を生し一度疑惑を取候亦は諸事右に准し容易に難被行實に

御政道之第一に可心付事歟

一舊幕元町方與力同心御採用

一岡引又は目明しと唱候もの

一酒造一件 但在々

右三ヶ條は彼是申候もの多く尙篤と御内探被爲在度尤右與力同心又は岡引共一時に御廢止と聞知り候は、何様人心を動搖爲仕候哉も難計其邊之豫防禦配慮之上に無之候亦は如何可被爲在哉

一速に被

仰出度は窮民御救助之儀と盜賊御取締之兩條就亦も

御着輦を奉待候民心 御憐察奉願度

一吳々も奉恐懼候得共奉懇願度御儀は御役々一和協心戮力 御仁政と之

儀は御實際之上自然下々奉唱上候様仕度

右は御談之趣難默止存付候寸懷書取入御聽候

十月

八八 中山忠能書翰〔岩倉具視宛〕 明治元年十一月六日

追亦尤不及御直答且只今伺に不及候也

加寒候彌御安全奉賀候併少々御違例嘸々御困令恐察候如何被爲在候哉尙御自愛專一奉祈候御旅中實に御困と奉察候相應之義何成共被命候様願入候此間尾形御差向之御様子は承少々安心仕候得共小子も兩三日風邪無據平臥昨日押亦出仕仕候得共貴君には御同様之由傳承御案事申上